
とある風紀委員（ジャッジ）の能力喰い（ファクリティーター）

神偽 臈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある風紀委員^{ジャッジ}の能力喰い（ファクリティーター）

【Nコード】

N3955R

【作者名】

神偽 朧

【あらすじ】

とある学生が学園都市に行く御話。

色々と自己解釈有り。そして、作者は計算とかが苦手。まあご都合主義だと思っただされば結構です。

基本ほのぼの目指したいなと思ってます。

因みに、この小説は某エブリスタでも投稿されています。改良版と

考えていただいて結構です。

この作品に限らず、私が書いている作品は全てパソコンからですの
で、携帯で見ると読みづらいかもしれませんが、そこはご了承ください
さい

プロローグ的な(前書き)

ここから先は駄文やご都合主義などで構成されています。覚悟がある方のみ読んでください。

ブローグ的な

〈拜啓 敬愛なるお母様〉

おはようございます、こんにちわ、こんばんわ、おやすみなさい…
一体今の時間帯はどの言葉が一番適しているのでしょうか。まあ此方に合わせてこんばんわとさせていただきます。

其方の生活はどうでしょうか？ 此方の生活は結構充実しています。というかし過ぎてる感があります。

このままこのんびりとした生活を送ろうと思っていたのですが、
現実はその甘くは無いようです。

4

日本某所 どこかのお家

「待ってくれ母さん、もう一回言ってくれないか？」

「だから、学園都市に行つてきなさい」

季節が入れ替わり、世間では夏休みなるものが近付いてきている今日この頃。

しかしまだ夏休みではない。目の前に居る才色兼備なお母様は何を言っているのだろうか？ 明日も普通通り学校はあるんだよ？

「お母さんとお父さん、海外でも仕事してるのは知ってるわよね？ で、そこから”ここを本拠地としてやって欲しい”っていう依頼が来てね。元々考えていたし、丁度良かったの。お分かり？」

「それは知ってるけど…それと俺の学園都市行きはどう関係があるの？」

海外に行って仕事するなんて事は、俺の両親にとっては当たり前だ。この間は二週間くらい帰ってこなかったし。………寂しくなんかなかったよ！

「今回は一週間や二週間どころじゃなくて、半年以上はあっちに居なきゃいけないの。そこで、噂では治安が良くて尚且つ面白そうな学園都市に編入させることにしました。っていうかしちゃいました」

「はあっ！？ ちょっと待って母さん！ その言い方だと既に入学手続きその他諸々終わってるとしたか…」

「してるわよ？ 一ヶ月以上前に」

「オウシット！」

入学手続きが完了してることに驚いたけど、一ヶ月以上も前に手続きをしてたっていうのも驚きだよ！

「てか治安なんてここも結構良い方でしょ？ なんで態々学園都市なんかに？」

「最近は物騒になってきたからねー。お母さんとしては一緒に連れて行きたいのだけれど、貴方英語喋れないでしょ？」

「痛いところを突いてきますな…。俺としては、十ヶ国語喋れるようになるにはどうすればいいのか聞きたい」

「練習すればいいだけよ」

「出ました天才発言」

日本語はいいとして、それ以外だったら…中国・韓国・英語・ドイツ語・ポルトガル語・ノルウェー語・スウェーデン語・デンマーク語・フランス語・イタリア語・ブラジル式ポメラニア語 e t c…

「なーに、お前もやれば出来るさ」

そう言っつて母さんの後ろから出てきたのは、我が家の大黒柱である父さん。仕事は母さんと同じでブランドの企業で社長。母さんは秘書。俺は凡人。何だこの違い。

つか小さな部族の言葉すら理解するアンタ等は正直異常だと俺は思うよ？

「あら、学園への手配は問題ありませんでしたか？」

「ああ、問題無い。クロ…理事長は快く承諾してくれたよ」

「はあ、もう手遅れって事ね…。はいはい、分かりましたよーだ。で？ いつ行けばいいの？」

「今週中だな。まあ焦らなくていいぞ」

そう言っつて部屋を出て行く2人。俺は大きな溜息を吐き、ゴロン…と仰向けになる。

クラスの奴等には何て言おうかとか何を持っていこうかなとか考えているうちに、俺は夢の世界へと旅立っていた。

ブログ的な(後書き)

いかがでしたでしょうか？ 意見・感想などがあればよろしくおねがいします

フアクリティ―1

学園都市某所

そこは暗い部屋。明かりは部屋の中央部にある生態維持槽から発せられる微弱な赤い光のみ。

生態維持槽は弱アルカリ性培養液で満たされており、その中には逆さまになった『人間』が目を瞑って浮いている。

その『人間』は男とも女とも、子供とも老人とも、聖人とも囚人とも見えるような……『人間』

その『人間』……学園都市最大権力者である学園総括理事長…アレクスター・クロウリーが目を開けると、生態維持槽の外に一つのスクリーンが出現する。

（いきなりというのは予想外だったが、これはこれでタイミングが良い。”原石”…それも大が付くほどの”大原石”。能力自体は開花していないが、この学園都市に来ることではそれは花開く…）

スクリーンに映るは一人の青年。詳細なデータがズラリと書き留められており、アレクスターはそれを流し読みしていく。

（鞍嶋 優璃…歓迎しよう。”大原石”として…ね）

僅かながら、不敵に笑うアレクスターはスクリーンを消し、再び目

を瞑る。

.....既に物語りの歯車は 廻り始めている.....

学園都市.....東京都西部の未開発地域を切り開き、名目上は記憶術や暗記術だが、本来は脳の開発を行っている超能力研究都市。

脳の開発以外にも科学技術などが大きく発達しており、『外』とは2〜30年も技術力が離れている。

総人口は約230万人。その内8割は学生が占めている学園都市。学園都市の内部は二十三の学区に分かれており、一学区ごとに特徴がある。学園都市の最大権力者である総括理事長はアレイスター・クロウリー。その下についているのが、学園都市統括理事会。

能力開発の為、機械などによって人為的に生徒の脳の中にある”種”を弄って障害を起こさせることで、他人とは違う世界を想像し、”掴み取る”自分だけの現実”パーソナルリアリティを発生させ、”才能のある人間”に仕立て上げる。

能力によってLEVELがあり、学園都市では6つのLEVELに分けられている。

【LEVEL0】

無能力者であり、一般人と何ら変わらない。学園都市の60%はこれに当たる。

【LEVEL1】
低能力者であり、多くの生徒がこれに当たる模様。スプーンなどの無機質で小物の物を曲げる程度。日常で役に立たない。

【LEVEL2】
異能力者であるが、LEVEL1とあまり変わらず、日常で役に立たない。

【LEVEL3】
強能力者であり、日常で役に立つと感じるLEVEL。能力的にはエリート扱い。

【LEVEL4】
大能力者であり、軍隊では戦術的価値を得られるLEVEL。学園都市に数少ない。

【LEVEL5】
超能力者であり、学園都市に7人しかいない実力者。軍と戦争できる程の力を持つ。

勿論例外もあるが、大体はこのような感じである。学園都市の噂では【LEVEL6】（絶対能力）もあると言われているが、確認はされていない。

LEVELに応じて奨学金が変わり、LEVELが高い程奨学金も多くなる。

そして、そんな学園都市にある第七学区のマンションのとある一室。

「……………ここ、何処？」

本作の主人公…鞍嶋くわじま 優璃ゆうりは困惑していた。何故なら、この一室に見覚えが無いからだ。

（あれ、昨日は普通に寝たよな？ こんなとこに来てないよな？
え、何？ 誘拐？ 何の為に？ まさか身代金？）

そんな事を悶々と考えていると、机に置かれていた自分の携帯がメールを受信した。

それは父からのメールであり、本文には目を疑いたくなるような事が書いてあった。

『ふむ、そろそろ目を覚ます頃か？ おはよう優璃！ 我が息子！ 驚いたか？ 驚いただろう。そこは学園都市第七学区のマンションの一室だ。今週中と言っただけで今すぐには行かないとは言っていないぞ？ 学校への手続きも全て完了しているから気にすることはない。このメールに添付している地図通りに行けば学校に着くはずだ。その学校には父さんと母さんの同級生である先生がいてな、月詠つきよみ 小萌こもえという人物がいるはずだ。その人に会え。あ、仕送りは心配しないでいいぞ？』

そこでメールは終わっており、優璃は口端をヒクヒクさせながら携帯を睨みつける。

「ふ、ふふふ…ま、まあ落ち着くんだった俺。クールだ、クールになれ…」

携帯を叩き付けたい衝動に駆られるが、ベッドを殴ることによって

我慢する。

それから部屋を見渡す。部屋は結構広めの部屋で、大きめのダンボールが数箱。他には液晶テレビ42インチ・机・タンス・冷蔵庫などなど、日常生活に必要なものが置いていた。

「はあ、なっちまったことは仕方ねえか…」

もう一度携帯に添付されている地図を見て、優璃は乱雑に置かれたダンボールの箱を足で退かせ、部屋を出て目的地へと向かう。

時刻は既に8時半。地図を見る限り時間にして15分掛かるか掛からないか。

優璃は別に方向音痴ではないので、初めての場所でもスラスラと通学路を通って行く。

学校に到着し、門をくぐり、玄関でスリッパを履き、案内板を見て職員室に向かう。

今はHRか授業中なのか、生徒の通りは一切無い。

職員室の扉の前に着くと、2回程ノックして中へと入る。

「失礼します。えーっと、月詠先生っていらっしやいますか？」

職員室に入るなりそう言いながら全体を見渡す。

殆どの教師が唾然とする中、1人の”少女”が優璃の元に寄って来た。

(え、子供?)

疑問符を頭に浮かべる優璃。見る限り赤いランドセルが似合いそうな小学生並みの身長しかない”教師”…彼女こそが、月詠 小萌である。

「呼びましたかー？ あれ、見ない顔ですけど…どちら様ですか？」

「あ、えつと…月詠先生でいいでしょうか？」

「はいですよー。あ、もしかして転入生の鞍嶋 優璃ちゃんですか？」

「はい。あの、両親が手続きその他諸々既に終わっていると聞いたんですけど…」

目の前に居る”教師”を見ながら、優璃は内心「本当に教師なのかよ…」とか思いながら丁寧に質問する。

「はいっ、終わってますよー。あ、色々と説明することがあるのであそこの応接室で待ってて下さいですー」

指を指された部屋に向かい、優璃は小萌が来るのを待つ。数分後、小萌は色々書類やら鞆やらを持って応接室に来た。

そこからは普通に学校での注意事項や能力に関してなど、常識的な話をする。

そして優璃は、気になったことを小萌に聞く。

「すみません、父さんと母さんが月詠先生と同級生って聞いたんですけど…」

「あ、紅きちゃんと黒きちゃんですか？ はい、私達は同級生ですよー」

鞍嶋くまじま 紅こうききち・鞍嶋くまじま 黒くろききち…優璃の両親であり、ブランド会社の社長と秘書。ブランド物の品の他、機械などの製品も売り出している大企業。

「よし…っと。では、色々と準備があると思うので、二日後にまた来てください。早く終われば明日でも良いですけどね」

「分かりました。では、失礼します」

用が済んだ優璃は小萌と職員に別れの挨拶を告げ、両手に鞆やら教科書やらを抱えながら帰って行った。

フアクリティ―1（後書き）

明日テストなのになにやってんだろ……。意見・指摘・感想待ってます。でも指摘されたとしても直すかどうかは分かりません

ファクリティール2（前書き）

今のうちに言っておきますが、更新不定期です。若しくは気分です。それと主人公設定とかですが、後々載せていきたいと思います。今手短に言っちゃうと、優璃は身長190cm、体重80kg、筋肉質で髪は黒の短髪。顔は厳ついという意味でカッコイイの部類です。厳つい顔なので、近寄りがたい雰囲気纏っています。故に好意を向けられたことは殆どありません。という設定です

フアクリティ―2

マンションの一室へと戻ってきた優璃はダンボールの中身を整理し、時間を掛けて部屋を自分色に染め上げる。

その作業だけで3時間は過ぎ、次は部屋に備え付けられている設備を確かめるべく、部屋中を歩き回る。

あとはネットの回線やテレビの受信状況を確認し、一段落着くためにベランダに出る。

外は既に夕焼けでオレンジ色の空が続いており、生暖かい風が身体を吹き抜ける。

「……………そういや、晩飯の食材買ってないじゃん」

これは一大事だ。と、優璃は財布の中身を確認して外に出る。

育ち盛りの優璃にとって朝昼晩の食事は必要不可欠であり、どれか一食でも外すと体調不良を引き起こしてしまうのだ。

現に昼食を抜いたので身体に上手く力が入らない。

優璃は空腹から来る苛立ちを抑えながらスーパーへと赴き、使いそうな食材と日用品を片っ端から籠に詰めて行く。

勿論試食コーナーでは二口以上は口に含め、少しでも腹を満たす。

少し空腹感が減った優璃は帰るときに歩きながら食べる為のパンを一つ入れ、会計を済ませる。

因みに今回一回の出費は既に8000円を超えており、某テレビ番組の一月一万円生活であったら負けは確定であろう。

しかしそんな出費も食べ物のためならお構いなしの優璃は食材が崩れないようビニール袋に入れ、両手で持つのは面倒なのでカートに乗せたまま帰ることに。

優璃自身気付いてないようだが、巨漢の蔵つい男がパンを食べながら大きなビニール袋が二袋乗ったカートを押しているのは中々にシユールな光景であり、道行く人々は視界に入れば嫌でも振り返ってしまう光景だった。

外に出る頃には日は沈んでおり、夜道は街頭や看板などの電気によって人工的な光を放っている。

ゴロゴロゴロ…と断続的な音を発しながらカートを進めて行くと、前方20m程先で人が避けて歩いているのが見えた。

(何だ？ 喧嘩なんかか)

こういう事には経験が多い優璃は直感でそう感じ、歩くスピードを緩めて会話が聞こえる範囲で止まる。勿論疑われないように自然に

「よう姉ちゃん、何も難しい事言ってるじゃねえんだわ。唯さ、俺達と遊ぼうぜって言ってるだけだよ」

「帰りは遅くならないからよお、多分。ブツ、ギャハハハハ！」

「アアン？ 何見てんだコラ」

「い、いや、僕なにも…」

聞くところ不良が4、5人束になって女性1人に絡んでいる状況。

通りかかった人にも迷惑が掛かっており、正直見過ごせない状況であると認識する優璃。

（ハア……お食事前の運動といきますか）

余ったパンを飲み込み、優璃は女性の下へと向かった。

正直面倒なことになった。

夕飯の食材を買いに来たらこんな不良共に絡まれるなんて…。

しくじったわ。”ジャッジメント”の腕章を持っていれば、直ぐに言い治められたのに。

「なあなあ、俺達と遊ぼうぜえ？ 損はさせねえからよ。ギャハハハ！」

鬱陶しいたらありゃしない。誰がアンタ達みたいな連中と絡むのよ。

何なの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？

黙っていても一向に状況は良くなるので、そろそろ実力行使に移ろうかなと考える。5人は厳しいと思うけど、能力で見ても武器の類いは持ってなかったし。

私がそう思って声を出そうとすると、1人の男性が声を発した。

「おいアンタ等、その人困ってんだろ。帰らせてやれよ」

その人は威つい雰囲気纏っていて、怖いイメージ。長身と見るからに筋肉質の身体がより一層近付きがたい雰囲気を醸し出す。

「ああん？ んだテメエ！」

「なんか文句でもアンののか、ええ？」

そんな彼を目の前にしても怖気づかない不良共。この辺は肝が据わってんのかいないのか。私なら謝るわね。

「まったく、アンタ等恥ずかしくないのかよ。多人数で女1人囲んでよ。この意気地無し共が」

「なっ、テメエ！」

意気地無しという言葉が癪に障ったのであろうか、5人の内4人は彼に殴りかかって行った。

だが意気地無しというのは私も同感だ。

(どんな場所でもこういふ輩はいるんだねえ…ハア)

優璃は心の中で溜息をつき、初めに殴りかかってきた坊主の右拳をヒラリと避け、右手で坊主の後頭部を地面に向けて下ろし、下から膝蹴りをお見舞いする。

ゴギユツ、という鼻の骨が折れる音と感触が膝から伝わり、優璃はやり過ぎかなーと思いつつ坊主を踏みつける。

「テメエ、よくもたつつんを！」

たつつんとは恐らく坊主の事であろう。続いて3人が纏めて掛かってくるが、優璃は片方ずつの手で2人の顔面を鷲掴みにし、中央の不良を挟むようにして叩き付ける。

又もやゴツンツ…という鈍い音が響き、優璃は手を放して悶絶する不良を見る。

「はい、こんななんなりたくなかったらどっか行きなよ。あ、君はもう帰ってもいいんだよ？」

優璃は絡まれていた眼鏡の女性にそう施すが、返って来たのは不良の方からだった。

「ハッ、少しはやるようだが、所詮は無能力者！ レベル3の俺に敵う敵じゃねえよ！」

そう言うと男の手が蒼白く発光し、優璃に向けて電光が放たれ地面が黒く焦げる。

(うっそ、コイツ能力者？ ていうか今のが能力？ なにそれカッ
コイインですけど)

焦ってはいるが能力者と出会えたことの方が嬉しかった優璃は、思わずニヤケてしまう。

(しっかし、対能力者なんて初めてだぞ。相手が電気ならなんか対抗できる物………あっ)

優璃は何かを思い出したのか、身を翻してビニール袋を漁りに行く。

「おいおいどうした逃げんのかよ！ ヒヤヒヤヒヤ！ 腰抜けにも程があんぞ！ デカイのは図体だけですかア！！？」

「ハッ、なわけねえだろ」

ビニール袋の中から目的の品を手にした優璃は、もう一度男の前に現れる。

(フライパンと……掃除に使う厚めのゴム手袋？)

女性は優璃の手に持っている物を見て疑問に思う。それは男も同じで、それを見た途端に馬鹿笑いをして馬鹿にする。

「ギャハハハハ！ そんなんで何ができるんだっつーの！」

優璃が男に向けて走り出したと同時に、男は電撃を放つ。

対して、優璃は男が電撃を放つ直前にフライパンを前に投擲する。

バチバチバチバチ！！

「何っ！？」

すると、電撃は優璃に直撃せずフライパンに集中し、がら空きになった胴体に拳を1発めり込ませる。

「うほ……おぶ」

白目を剥いて倒れ込む男。優璃は一息つき、女性に声を掛ける。

「ふう、大丈夫ですか？」

「あ、はい。助かりました。……にしても、強いんですね」

「ん？ ああ、こういう機会も多かったし、親の影響だね。じゃ、気をつけて帰ってくださいよ」

優璃は焦げ焦げになったフライパンを広い、また買いに行かなきゃなー……と内心落ち込みながらその場を去ろうとするが、女性は優璃を引き止める。

「あの、すみません。名前を聞かせてもらってもいいですか？」

「……えーっと、名乗る前に貴女は？ まずは自分からだと思うんですけど」

「あ、そうですね。私は固法^{このり} 美偉^{みい}です」

「固法さんですね？ 俺は鞍嶋 優璃です」

「鞍嶋さんですね。改めて、先ほどありがとうございます」

「いえいえ、大したことはないのです。じゃ、お気をつけて」

「はい、さようなら」

そう言葉を交わして別れる二人。しかし優璃はマンションへと戻らずに先ほどのスーパーへ。

「フライパンが完売……だと……？」

夕食はカップラーメンになったそうなの

ファクリティール2（後書き）

オ、オチがわからねえ…orz

フライパンは金属製なので、それを自身より前に投げたらそっちに引かれんじゃね？ 的な自己解釈で雷はフライパンに集中しました。厚手のゴム手袋は、殴ったときに感電するかもしれない可能性を考慮したためです。

こんなんですけど今後とも御鼻屑に 感想・意見・その他諸々待っています。

フアクリティール3 (前書き)

明日でテストは終わりだ…頑張れ俺

フアクリティール3

翌日、フライパンを買えなかったシヨックからカップラーメンを4つ胃袋に詰め込んだ優璃はやることをやってから就寝し、またもや朝食をカップラーメン4つで済ませた。

非常に健康に悪いが、手元にある簡易食料はこれしかない為仕方が無い。

昨日小萌からは早く来れるなら今日来ても良いと言われたので、優璃は昨日手渡された白い半袖ワイシャツに腕を通し夏用の通気性の良い黒いズボンを履く。

鞆には筆記用具とノートを一冊入れ、片手に上靴を持つての実質初となる登校を開始した。

時刻は8時丁度。のんびり歩いてても間に合う距離なので、優璃は第七学区の町並みを観察しながら歩いていく。

(そついや学園都市の地理全然把握してないな…時間探して歩き回ってみるか)

地味にその地域の地理を把握するのが好きな優璃は頭の中で予定を組み、学生達が交差する交差点を歩く。(ギャグじゃない)

8時13分に学校に到着。登校する生徒は初めて見る優璃に好奇心と畏怖の眼差しを向けながら登校し、同時に優璃の半径3mから離れ

て避けるようにしている。

「…ハア」

そんな状況にある優璃だが然して疑問に思わず溜息を一つ吐き、歩き出す。

他を威圧するような体躯と厳つい顔が相俟って関わりにくいという自覚はある優璃。

前の高校では小学生の時から友人のお陰で周りと同染めたが、その友人が居ない今、優璃は溜息を吐くしかなかった。

(別に、関わりたくなきゃ関わなくていいっつーの)

来る者殆ど拒まず、去る者は去れ。の優璃は、生徒を睨みつける訳でもなく、気だるそうな眼まなこで正面のみを見ていた。

上靴を履き、迷わぬ足取りで職員室へと向かう。

「…失礼します」

ノックを二回し、礼儀正しく入室する優璃。基本的に年上と女性には礼儀正しいので、前の高校では教師からの評判は良かった優璃。要はコネを作っているのだ。

「ん？ お前は確か……ああ、昨日来た鞍嶋って奴か」

職員室に入るとジャージ姿の女性、黄泉川よみかわ 愛穂あいほが優璃を見るとそう言った。

そういえば昨日チラツと視界に入ったなーとか思った優璃は、社交辞令という名のコネ作りをする。

「おはようございます、えーっと…」

「私は黄泉川 愛穂。よろしくじゃん」

「あ、はい。おはようございます、黄泉川先生。（語尾に）じゃん
”付ける人初めて見た…”」

顔には出さないが引き攣りそうな顔を我慢し、自身の目的を述べる。

「あの、月詠先生はいますか？」

「月詠先生？ ああ、いるじゃんよ。おーい、月詠せんせい！」

「はいですよ」

そう言つてトテトテと此方に向かってきたのは”小学生”に見える”教師”。前述で述べた通り、月詠 小萌は教師なのである。しかし着ているピンクのフリフリが付いている可愛い服装は、よりその容姿とマッチングしていて赤いランドセルを背負わせたら絶対に百人が百人小学生と答えるだろう。

酒豪と、中身はオッサンなのだ。

優璃は昨日既に見ているとはいえ、奇行の眼差しで見えちゃう。
”この生物は一体何なのだろうか？”という疑問を抱いて。

「あ、優璃ちゃんおはよーですっ」

「え？ あ、はい。おはようございます、月詠先生」

己の中で葛藤を続けていた優璃は突然声を掛けられたことに驚き、素っ頓狂な声を上げてしまう。

(こんなんがあのお父さんと母さんの友人……有りえねえ)

「ではですね、もうそろそろ朝のHRが始まるので一緒に行くですよ」

優璃の心の声は小萌によって掻き消され、失礼しましたと言って職員室を出る。

廊下に出た途端に電子的なチャイムが鳴り、各教室でHRが開始される。

既に優璃が入るクラス、小萌が担当しているクラスには転校生が来るという事は知れ渡っているらしく、今のクラスはそれで持ちきりだそうだ。

男か女か、容姿はなんだとか、性格はどんなんだとか、女なら美人・美少女・ロリ・外人・双子・お嬢様e t c ……がいいとか、そんな感じ。

尚、女ならe t cまでは青髪で耳にピアスを着けた人物が言っていたらしい。

2人は教室に辿り着き、小萌は優璃を廊下に待たせて先に入って連

絡事項を済ませてしまおう。

『はい、では前から言っていた転入生を紹介しますよー』

すると、中からザワザワと多少五月蠅くなる。柄にも無く緊張している優璃はいつも通りだと落ち着かせ、小萌の合図を聞いて教室に入る。

「うわあ、でつか…」

誰かがそう言った。しかし優璃は気にする事無く教壇の前に立ち、黒板に名前を書いて自己紹介を行う。

「初めまして、鞍嶋 優璃です。なんか友人からは近寄り難いとか怖そうなんて言われてますけど、そんな事ないと思うんで仲良くしてくれると幸いです。これからよろしくお願いします」

簡潔に、笑顔で話し、教団を少し離れる。少し時間を置いて拍手が聞こえ、優璃は内心ホツとする。

「優璃ちゃんは先生の友人の息子さんでして、とてもいい子ですよー。皆も仲良くしてくださいねー。では優璃ちゃんは中央の一番後ろの席に座ってくださいですー」

短く返事をし、優璃はデカイ図体を捻りながら一番後ろの席に着く。

「ではこれでHRは終わりますけど、五月蠅くならない程度になら優璃ちゃんに質問攻めしてもいいですよー」

(なにそれ聞いてない)

その後、小萌の後付があつた為か優璃の元に人だかりが出来、容赦ない質問攻めを受けた。

彼女はいるのかとか、前の学校はどこだとか、好みのタイプはとか。そんなまともな質問からくだらない質問まで丁寧^{ていねい}に答えていき、HRは終了した。

優璃の順応性と適応性が高かつた為か、クラスメイトと比較的早く仲良くなれてクラスにも馴染めるようになっていく。

初めに声を掛けて来たツンツン頭の少年、^{かみじょう}上条^{とうじょう}当麻^{とうま}とアロハシャツを着込んでサングラスをかけている金髪の、^{つちみかど}土御門^{とごかど}元春^{もとはる}と、青髪で耳にピアスをつけている変態趣味の、青髪ピアス達とは意気投合^{いぎたご}していた。

その際、委員長という名前が合いそうな黒髪ロングの少女、^{ふきよせ}吹寄^{ふきよせ}制理^{せいり}はこう言った。

『クラスのデルタフォースと仲良くするのは良いけど…お願いだから、その一員にはならないですよ？ 鞍嶋が入ったら手を付けられなくなるから』

…と。取り敢えず優璃は真剣な眼差しでお願いしてくる制理+クラスメイトの殆どの瞳に気圧された優璃は、「え？ あ、ああ…うん」という生返事で了解しておいた。

行われている授業は然程前の学校とは変わらず、優璃はノートを取っていたのだが、能力に関する授業は全くと言って言い程ムリダナ状態であった。

初の能力関係授業という事もあるのだが、それにしても頭に入っていない。精々感覚的に分かる程度だ。「あ、要はこんな感じでしょ？」みたいに。

因みに今週は”システムスキャン身体検査”の週間なので授業時間は午前中だけとなっており、授業が終わると元春と青髪が優璃の歓迎会を開こうと企画したので、それに乗ることに。

昼間つから大勢で焼肉食べ放題の店に押し込み、そこからは完全下校時刻ギリギリまで飲んで喰ってを繰り返した優璃は、登校初日としては大成功かな？ と思いつつ、マンションへと帰って行った。

ファクリティール3（後書き）

だからオチがでないんだよ！ いつになったら能力者との戦闘になるだろう……。感想・意見・その他諸々待っています。

ファクリティール4（前書き）

久しぶりの更新です。腰が痛いんです。足も痛いんです。何か身体中痛いんです

フアクリティ―4

前にも言った通り、今週は”システムスキャン身体検査” 週間なので午前授業である。

そして今日が優璃の高校が通う学校の身体検査日である。

しかしクラスの皆がゾロゾロと教室を出て行く中、何故か優璃だけが机に突っ伏していた。

「……………」

遠目から見ると、グリズリーが寝ているようにも見える。

顔を見てみると、その顔は酷く疲れているようだった。

「…………頭痛え」

非常に珍しいことだが、もう一度言う。非情に珍しい事だが、優璃の首筋に電極を貼って電流を流した途端、優璃は激しい頭痛を訴えだしたのだ。

まあぶっちゃけ電極剥がして逃げてきたのだ。

「……………あー、マジ痛え」

これには同伴していた小萌も驚いたようで、一言二言言葉を交わすと教室に居るといふ決断が下った。

小萌はそのまま職員室に直行して行ったが。

電極が貼られていた場所を擦りながら皆の帰りを待ちつつ、ぐでーっと机に突っ伏す。

暫くして数名が帰ってくる中、当麻が声を掛けて来た。

「おい優璃、お前大丈夫か？」

「むあ？ おお、上条か。…まー、大丈夫っちゃ大丈夫だけど。アッって最初っからこんなもんなのか？」

「いや、俺がやった時はピリツと来る程度だったぞ」

やはり俺がおかしいのか…とか考える優璃だが、同時に電流強かっただけじゃね？ と同時に思うが、今は分からない。

「ま、俺は良いとしてさ。お前はどっだったんだ？」

「あ、俺？ あー、そっぴや優璃知らなかったな。実は上条さんはレベル0の無能力者でありんすよ。お陰で奨学金も少なくて貧乏学生まつしぐら…」

「ははは、貴様奨学金すら貰えない俺に対してのあてつけかこの野郎」

そう言いながら、おふざけで当麻を睨む優璃。

思えば、”システムスキャン身体検査”を結果として受けていない優璃は、奨学金な

ど受け取れない。まあ実は無くても支障はないのだが。

「じよ、冗談だよ冗談。ふざけてても睨むの止めてくれ、正直怖い…、つてか言う通り、奨学金とかどうすんだ？」

「そんなに怖えかな…。でも心配は要らんと思っぞ？ 普通に親から振込みで来るし」

「お前金持ちなんだな」

貧乏学生の当麻としては、忌むべき存在である。勿論個人的にだが。こっちはこんなにも我慢してんのにお前等…ッ！ 見たいな経験が数多く。その学生の殆どがお嬢様学校の常盤台中学の生徒である。

「何血の涙出しそうな顔してんだよ」

「ふんだ、全然悔しくなんかねえんだからな！」

「「「「「上条キモい」「」「」「」

「……………」

ツンデレ口調で優璃に言い放った瞬間、クラスの皆から罵声が飛んでくる。そしてズーンとテンションが下がる当麻。

「不幸だ…」

「（俺は自業自得だと思うけどな）」

「カミヤんがツンデレ使^{つか}うても誰得な感じやなー。っーかカミヤん、ぶっちやけキモかったで？」

「まあカミヤんには早すぎたんだにゃ。ツンデレ使^{つか}うなら先ずは女にならんと」

「もうやめて！ 上条のライフはもう0よー！」

涙目で優璃に縋^{すが}って来る当麻だが、優璃は

「触るな下郎」

と言って追い払った。勿論お遊びである。

暫くクラスの全員で当麻を弄^{もよほ}っていると、小萌が「はいはい、テーマーら黙^{もく}りやがれですよーっ」と言って入^いってきた為、全員が席に着^かく。

HRは直ぐに終わり、それぞれが帰る支度をする。

優璃は先ほどの頭痛などは何だったのか小萌に聞いたが、今は分からないと言う。結論としては、学園統括理事会などの上層部に報告してからだとか。

まず統括何ちゃらって何？ と思う優璃。

別に能力なんてあってもなくても良いと思^{おも}っている優璃はそれほど気にする事無く、あ、そうですかと返事を返す。

午前授業と言う事で午後から暇な学園都市の学生達だが、転校してきたばかりの優璃にとっては別段暇という時間ではない。

当麻達との遊びを断り優璃は昨日品切れで買えなかったフライパンを買い、序にセブンスミストというデパートに向かい、私服の服を少々選ぶことに。

あまり衣服を気にしない優璃だが、どうせ学園都市に来たんならという理由と好奇心で物色してみることに。

「（えーっと、サイズが多く取り揃えてるのは………お、四階か）」
エレベーターは距離的に遠かったので、案内板を見たらエスカレーターで四階まで行く。

この階は比較的大きな服などが置いてあり、他にもブランド物の時計やバッグが揃えられている。

「へー、結構揃ってるな」

体躯のデカイ優璃は最低でも4Lは必要なので、学園都市外だと売っている場所が限られてしまうのだ。

しかし学園都市は様々な学生が住み込んでいるため、比較的多くの大きいサイズの服を売っている。

結局見るだけで買わなかった優璃は、向かいに商品を並べている腕時計屋に立ち寄る。

しかし、優璃は腕時計に興味は無い。優璃が気になったのは、大きく貼り出されている広告だった。

「（…『新作入荷！ K3の超高性能腕時計！』ねえ…）」

K3(ケースリー)：鞍嶋 紅黒【Kurasima Kouko ku】という今や世界で知らぬものは居ないというほどの主にブランド品を扱っている大企業。年商3000億を平均的に叩き出しており、最高額はその倍に当たる6000億を一代目で稼いだ成功会社としても有名。

一般的にはK3と呼ばれており、正式名称は極一握りの人間しか知らされていない。

人気の理由は様々だが、客には高級素材を使っているのに何処よりも安いというのが引き寄せているらしい。最近は科学製品も作り出して売っているとか。

そしてこの大企業を営業しているのは、字を見ればわかるように優璃の両親である。

「(今頃蛇皮欲しいからって素手で格闘してるんだろーな…)」
優璃から見ても、父と母は異常である。特に父である紅壱なんかは、グリズリーの毛皮が欲しくて素手で挑んで勝利した化け物だ。「アంతはバキの父親なんかか！」と突っ込んだ覚えがある。

優璃は昔のことを思い出しながら、展示品として置いてある超高性能腕時計を手にとって見てみる。

チタン合金と蛇皮が組み合わさった腕時計で、時計の数字は光り輝くダイヤモンドであった。

傍に置いてあった説明書を見ると、電池とソーラー式で、ホログラ

△の小さい地図も出るらしい。

「（無駄に高性能過ぎんだろ）」

たかが腕時計にどうしてここまで金を掛けるんだ？　と思いつつ、優璃は腕時計を元の場所に戻す

そして昼飯を買って帰ろうとセブンスミストを後にし、優璃は全国的に有名なファーストフード店に向かい、昼食を調達することに。

店内は昼頃とおうこともあってか込んでいて、殆どが持ち帰りをしていた。

「…、いらっしやませー、店内でお召し上がりでしょうか？」

「…持ち帰りで」

優璃の担当になった女性店員は少し怯えた営業スマイルで接客してくるが、優璃は慣れているのでそのまま注文へと移る。

「えーっと、ハンバーガー単品二つ、チキン南蛮単品一つ、ダブルチーズバーガー単品二つ、テリヤキ単品一つ、ナゲットのマスタード一つ、ポテトのＬ一つ、ウーロン茶Ｌ一つで」

いくらなんでもファーストフードでそれは買い過ぎだと思う。

店員は注文を聞きつけると驚きの速さで用意し、優璃を追い出すかのようにありがとございましてと言ってきた。

店を出てマンションに帰る途中、優璃は手提げ袋から漂ってくる良

い香りを嗅ぎながら、路地裏の入り口で足を止める。

「（…飯の前にちよつと冒険でもしてみようかな）」

マンションがある場所は大体分かっているので、優璃は地理を把握する為にも路地裏へと入って行く。

その壁には落書きなどが書かれており、不良の溜まり場みたいな存在ということが分かる。しかし今は人影は見当たらず、穴の開いた金属のバケツだけが転がっていた。

方向感覚は良い方なので、優璃は勘を頼りに前へと進む。そして暫くすると、後ろから視線を感じた。

振り返つてみると、そこには

「……………（キラキラ）」

キラキラとした瞳で昼食を見る一人の少女だった。

「（……………え、シスタ…教会の子供か？）」

優璃よりも一つか二つくらい年下で、（外見的に見れば大人と子供）外国人なのか純白の白い肌に光を反射する輝く銀髪。服装は教会のシスターが着ていそうな修道服であるが、少女の服は黒ではなく白。恐らくシルクか何かの肌触りが良い高級な生地で、その所々には金糸の刺繍が織り込まれていた。

依然としてキラキラとした瞳で昼食を見る少女。

「（…腹減ってんのか？）」

優璃が右へズラすと、少女の顔も右へ。左へやると顔も左へ。

「（あ、コイツ腹減ってんのか）」

何となく少女の気持ちを理解した優璃だが、相手は子供とはいえ外国人だ。過去に英語で成績一を取ったことのある優璃にとっては、どう話しかけて良いのかが分からない。もしかしたら英語じゃないかもしれないし。

「あーっと、えー…：Are you a hungry?」

覚えている簡単な単語を並べ、何とか会話しようとする優璃。

「！ そう、私はお腹が減っているんだよ！ その良い匂いの食べ物を食べさせてくれると嬉しいかも！」

「って日本語喋れんのかい！」

少女は日本語がペラペラだった。

その頃、学園都市に存在する【窓のないビル】の中で、土御門 元

春はアレイスターを見る。

聖人にも囚人にも、子供にも老人にも、男にも女にも見えるその『人間』、アレイスターは目を閉じたままだった。

「アレイスター、知っていると思うが」

「ああ知っているよ。システムスキャンをしようとしたら痛みに耐え切れなくて結局システムスキャンを受けていない青年のことだろう?」

言葉を遮られ、更には自分が言おうとしていたことを当てたことに驚く土御門。

「当然だろう、理事会にまで通ってきた時点で、私にも情報は入る」

「ハッ、そうだな。それで? あいつがこの学園都市に入ってきても計画は変わらないのか」

「問題ない。あちらが手を出さなければな」

「何?」

アレイスターの少し弱気な発言に、いぶかしむ目で見る土御門。今まで彼のこんな発言を聞いた人間は数えるほどしかいないだろう。

「言っておくが、彼ではない」

「……………どういうことだ?」

「知る必要はない」

「…ッ」

バツサリと断られたが、生憎アレイスターはこういう『人間』なので、結構慣れていたりする。

「では一つ聞きたい」

「何かな？」

「何故、鞍嶋 優璃はシステムスキャンを受けた途端に痛みを訴えたんだ？」

「彼は、特別なのさ」

特別：アレイスターが言う特別とは、恐らく【原石】としてのことであろう。

その一言で分かったのか、土御門は口を開く。

「…つまり、酷く繊細で脆く複雑な能力ということか」

「そうだ。能力自体は開花していないが、恐らく学園都市の第七位と同等かそれ以上の【原石】だ」

「なっ、…知っていたのか！」

「ああ、数年前にね」

そのことに驚きを隠せない土御門。

「まだ開花していない……と言う事は、まだ監視しなくてもいいのか？」

「いや、一応付けておこう。頼んだぞ」

「……………ケッ」

踵を返す土御門の前に、空間転移能力者が音もなく現れ、土御門と共に虚空へと消え去る。

一人残ったアレイスターの口元が、微かに笑っていた

ファクリティ―4（後書き）

永遠の課題…章のオチ。あー、腰痛い

ファクリティール5 (前書き)

未だに能力出る感じがしないが大丈夫か？ 大丈夫じゃない。全然大丈夫じゃない。

フアクリティ―5

「食べさせてくれると嬉しいな」

「……………」

「食べさせてくれると嬉しいんだよ？」

「……………」アレですか、君は見ず知らずの人に食べ物**ねだ**を強請るんですか。そうですね」

路地裏で少女と大男が対峙しているのを見れば、恐らく優璃は警備員アンチスキルのお世話になる事だろう。

警備員アンチスキルとは、言わば警察の機動隊だ。しかし実態は教職員で構成されているボランティア的活動だ。

校内はそれぞれの学校に配置されている風紀委員シャッジメントが、校外などの学区を跨いで治安を維持するのが警備員アンチスキルだ。

風紀委員でも学区を跨いで事件に関わることは出来るが報告書などの事後処理が面倒な為、殆どの人はやらない。やるものは主に能力者には能力者を向かわせた方が、被害は押さえられると思いい行動する者だけだ。

閑話休題

取り敢えず昼飯をあげるあげないは置いといて、少女の名前を聞くことに。」

「その前に、君の名前はなんて言うの？」

「私はね、インデックスって言うんだよ？」

疑問文を疑問文で返された優璃。

「いんでつくす…？ ああ、目次？」

「違う違う。禁書目録の方だよ。見ての通り教会の者で、イギリス清教に属しているよ？」

「（やだこの子何言ってるの？）」

イギリスって単語出てきたからイギリス出身の子なのかな？ とか考えるも、中々面倒な子供に絡まれてしまったと後悔する。

「それじゃあ私は言ったから、次は貴方の番」

「は？」

「だから、名前」

「あ、ああ。はいはい。俺は鞍嶋 優璃。高校生だよ」

「全然高校生には見えないね」

グサツ！ と、優璃の何処かが傷付いた。

「ま、まあいいや…、で？ インデックスさんは何がお望みなのか？」

「ゆーりの手に持つてる美味しそうなお食べ物が食べたいな！」

若干名前を呼ぶ口が舌足らずだったが、要はその食いもん寄越せと言っている。

見ず知らずの…いや、自己紹介はしたから知り合いか。先ほど知り合ったばかりの人に食べ物を強請るのは非常識だと思いが、恐らくインデックスはそれも構ってられない程に空腹なのだろう。

「……ハア、分かった。ここで喰うのは衛生上良くないから……あの公園で良いか？」

「ありがとう、ゆーりは優しいんだね！」

路地裏から見える位置に公園がポツリとあったので、優璃とインデックスは路地裏を出て信号を渡り、人が疎^{まば}らな公園に備え付けられているベンチに優璃 昼食 インデックスの順で座る。

「じゃ、俺は飲み物買ってくるから適当に喰ってな」

「分かった。じゃ、いただきます」

生憎飲み物は一つしかないので公園に設置されている自動販売機で飲み物を買うことに。ウーロン茶と食後のブラック珈琲を買い、ベンチへと戻る。

美味しそうに、そして幸せそうにテリヤキハンバーガーを食すイン

デックスを少し見てから、優璃もダブルチーズバーガーを口へと運ぶ。

美味し美味しと四口程度で完食し、チキン南蛮バーガーを手に取る。インデックスはハンバーガーを最早二つも完食しており、今はチキンナゲットを満面の笑みで食している。

見た目は敵ついが基本女・子供に甘い優璃は、バーガー二つで我慢して残りをインデックスにあげることにした。

そして数分後、二人は昼食を全て完食した。

「ぶはーっ、美味しかった。ありがとうねゆーり、お陰で行き倒れすることはなくなっただよ」

満腹満腹と言った感じでお腹を擦るインデックスの隣で、優璃は珈琲を飲みながらどう致しましてと言っ。

「ゆーりは凄く良い人だね。神のご加護があるように祈ってるよ」

「そらどーも」

無信教者の優璃は滅多なことが無い限り神という存在は信じない人なので、適当に返事しておく。勧誘されても困るし。

「ふう……じゃ、私は行くね」

そう言ってベンチから降りて、シスターのような、訂正。シスターらしい笑みを浮かべるインデックス。

優璃は寮にでも帰るのかなーとか思いつつ、「おう、気をつけて帰えんな」と見送る。

駆け足で再び路地裏へと姿を消す純白のシスターを見ながら見送った後、優璃はベンチに背を任せて晴天が晴れ渡る青空を眺め一言。

「……………腹減ったなあ」

やはりバーガー二つでこの屈強な体躯の栄養は補えないようだった。

「（確かさつき、クレープ屋が新しく出来たってチラシ配ってたな……）」

インデックスと出会う前、昼食を買う少し前に通った歩道で、女性店員らしき人物がクレープのチラシを配っていたのを思い出す。

「……………喰いに行くかー」

空になったペットボトルと空き缶を捨てると、ドラム缶の形を模した掃除ロボが回転モップで綺麗に拾ってくれる。

コイツ便利だなーとか思いながら、優璃は自宅とは別方向の道へと歩を進めるのであった。

ファクリティール5（後書き）

次回、やっと超電磁砲サイドの物語に突入。の予定。優璃の能力は
.....多分でない！ 感想その他諸々待ってます

ファクリティール6 (前書き)

足の裏が疲労炎症起こした。てか再発。兎に角最新話です。

ファクリティ―6

ファミリーレストラン【ジョーゼス】にて

”システムスキャン身体検査”週間なので、学園都市内にある全ての学校は午前中で生徒を解放する。

それは学園都市でも屈指のお嬢様校である常盤台中学も例外ではない。

この中学校は入学条件にLEVEL3、強能力者であることが決め付けられている。

尤も、入学にLEVELの制度を設けるのは珍しくはないのだが。

その常盤台中学は二人だけだが、二年生に学園都市に七人しかいないLEVEL5の生徒を保持していることでも有名である。

「私のファン？」

肩まで伸びた茶髪の少女の名は御坂みさか美琴みこと。学園都市第三位のLEVEL5、超電磁砲レベルガンの異名を持つ電撃使用エレクトロマスターだ。

美琴は頬杖をつき、向かいに座る茶髪をツインテールにしている少女、白井しらい黒子くろこの話いしを聞く。

「ジャッジメントの第一七七支部で、私のバックアップを担当して

くれている子です。一度でいいからお姉さまにお会いしたいと断る毎に……」

特徴的な口調で喋る彼女は常盤台中学一年であり、LEVEL4の大能力者で空間移動能力レポートの保持者である。

そんな彼女は美琴のことをお姉さまと呼んで慕っており、それは若干アブノーマルな雰囲気をも漂わせている。まあ恋愛感覚は人それぞれなので口出しはしないが。

「あああああ……」

と脱力感MAXの溜息を吐く美琴。彼女は”お嬢様”学校である常盤台中学に属しているが、ハッキリ言って全然お嬢様っぽくない。何しろ美琴は中流家庭出身で、何処あその貴族とかではなく厭あくまで一般庶民なのだ。今では一般庶民と懸け離れているかも知れないが。

美琴はこうというのが苦手だ。もつと気さくに接してくれた方が助かる。それにお嬢様という観点なら、向かいの席で紅茶を飲んでる黒子の方がよっぽどお嬢様だ。美琴は趣味がお琴とかそんな絵に描いたようなお嬢様ではない。まあ居るには居るが。

月曜と水曜はコンビニで立ち読みをすると決めているのだ。これの何処がお嬢様であろうか。

「お姉さまが常日頃からファンの方達の無礼な振る舞いに平衡されているのはご存知ですわ。けれど、初春は分別を弁えた大人しい子。それに何より、私が認めた数少ない友人。ここは、黒子に免じて一つ」

そう言つて黒子は飲み掛けのティーカップと皿をテーブルに置き、鞆から手帳を取り出す。

「あ、勿論お姉さまのストレスを最小限に抑えるべく、今日の予定は私がバッチリちよ、あぶっ」

何か嫌な予感がした美琴は黒子の手帳をスツと奪い、身を乗り出してきそうな黒子の顔を鷲掴みにして止める。

「えーと、何々？」 初春を口実にしたお姉さまとのデートプラン”。其の一：ファミレスで親睦を深める。其の二：ランジェリーショップに行く（勝負下着購入）。其の三：アロマショップでシヨッピング（媚薬購入）。其の四：初春駆除。其の五：お姉さまとホテルへGO」

空いている片手で黒子の手帳に書いてある事を一字一句そのまま音読する美琴。この内容は流石黒子と言つたところか。

「つまり、大人しく分別ある友人を利用して、自分の変態願望を叶えようか…」

「え…」

「読んでるだけで」

「あの…」

「すんげーストレス溜まるんだけどお！？」

手帳から手を放し、美琴は黒子の頬を両手で引っ張りまわし、今さ

つき出来たストレスを解消する。

「ふにゆにゆにゆにゆにゆ、誤解でしゅわお姉しゃまままま……むにゅんっ」

美琴は黒子から手を放し、黒子は赤くなった両頬を涙目で擦る。

「ハア。まあでも、黒子の友達じゃあしょうがないか」

「え……お、おお姉ーさまー！」

「えちよ、黒子!?!」

黒子は身を乗り出して跳躍。そのまま美琴の膝の上へと乗っかり、美琴に抱きついた。

「黒、」

「お姉さまがそんなにも黒子のことを思ってたなんて、黒子はもう、もう！ フワー、フワー！」

鼻息を荒くして抱きついてきている黒子に言葉を遮られた美琴。硝子越しの外を見れば、二人の少女が凝視していた。

「あの、お客様。申し訳ございませんが、他のお客様のご迷惑になりますので……」

「え、……」

そして店員に注意され、美琴は黒子に拳骨を一発お見舞いして外に

出ることにした。

外に出ると先ほどの二人が待っており、黒子は痛む額を手で擦りながら紹介することに。

「と言つ訳で、取り敢えずご紹介致しますわ。こちら柵川中学一年初春^{ういはる} 飾利^{かさり}さんですの」

「は、はいっ。初めまして、初春 飾利…です」

幼い顔立ちの黒髪で、頭に花を模った髪飾りをしている。しかし花の髪飾りに関しては本人に自覚が無いらしい。能力はLEVEL1の定温保存^{サマルハンド}。黒子の紹介で緊張しているのか興奮しているのか、少し顔を赤くしながら自己紹介する初春。

「それから…?」

今更ながらに、この人誰ですの? と気付く黒子。

「どーもー、初春のクラスメイトの、佐天^{さてん} 涙子^{るいこ}です。なんだか知らないけど付いて来ちゃいましたー。因みに能力値はレベル0でーっす」

肩甲骨の下まで伸びているセミロングの黒髪に、白梅の花を模した髪飾りを付けている佐天。自身がレベル0の無能力者であることに劣等感を感じているが、表に出さない。しかしやはりLEVEL5と聞くとどうせいけ好かない奴だと思ひ込んでいる佐天は、LEVEL0を強調してだらしなない感じで自己紹介をする。

佐天は絶対に自分を小バカにするだろうと腹を括っていたが、それ

は良い意味で裏切られる。

「初春さんに佐天さん。私は御坂 美琴、よろしく」

「よ、よろしく…」

「…お願いします」

美琴は二人の名前と顔を覚え、”いつも通り”に挨拶をする。それが意外だったのか、お嬢様に憧れていた初春と腹を括っていた佐天はその幻想を少しぶち壊され、間の抜けた返事をした。

そんな中、黒子は再び手帳を取り出して、「では、恙無くつつがな紹介も済んだ所で、多少予定は狂ってしまいましたが、今日の予定はこの黒子がバッチ」そう言い掛けたところで、美琴の本日二度目の拳骨を喰らう破目に。

「いたあい…」

「ま、こんな所に居ても仕方ないし、取り敢えず…ゲーセン行こっか」

美琴から発せられた言葉に、完全に幻想をぶち壊された二人。

「え？」

「ゲーセン、ですか…？」

ゲーセンってあのゲーセン？ ゲームセンター？ 良く聞く単語なのに脳内で自問自答してしまう佐天。まあ普通なら考えられないだ

ろう。お嬢様がゲーセンに行くなど。

しかし四人はゲーセンに向けてあることに。他に予定も無いし。あるとしても黒子の変態願望プランだけだし。

黒子が先頭、その少し後ろを美琴、そしてその一メートル程後ろを初春と佐天という列で歩いている。

「もう、お姉さまったら。ゲームや本の立ち読みではなく、もっとお花とかお琴とかご自身に相應しいご趣味をお持ちになれませんか？」

「うっさいわねー。お花やお琴のどこが私らしいっていうのよ」

そんな二人の後ろでは、初春と佐天が会話していた。

「なんかさー、全然お嬢様じゃない？」

「上から目線でもないですねー」

バス停を通り過ぎた所で赤エプロンをした女性がチラシを配っていたので、美琴と初春は流れでチラシを受け取ることに。

「ん？ なにそれ」

「新しいクレープ屋さんみたいですね。先着一〇〇名様に、ゲコ太マスケットプレゼントって…」

そのチラシはクレープ屋のものであり、チラシの左下にはコミカルなカエルのマスケットキャラクターがプリントされていた。

「何このやつすいキャラ。今時こんなのに喰い付く人なんて…あたつ。あ、すみませ…ん？」

いきなり立ち止まった美琴に佐天はぶつかってしまっただが、それを気にすることも無く美琴はチラシを、というかプリントされているゲコ太を凝視していた。その瞳には、ほ、欲しい…という願望が。

「御坂さん？」

「どうなさいましたのお姉さま。あらあ？ クレープ屋さんにご興味？ それとも、もれなく貰えるプレゼントの方ですか？」

え？ と初春と佐天の声が重なり、美琴は顔を少し赤くしながら。

「な、何言ってるのよ！ わ、私は別にゲコ太なんか…、だって蛙よ？ 両生類よ？ 何処の世界にこんな物貰って喜ぶ女の子が…」

鞆を抱いて否定する美琴だがその鞆の端には、ゲコ太のストラップが一つ、プラプラと付けられていた。

やっぱり美琴は、お嬢様という柄ではない。

優璃は、地理の把握も兼ねて再び路地裏を歩いていた。

店員と思しき人が配っていたチラシには、チラツと見たただけだが第

七学区のふれあい広場でオープンしていると書かれていた。

やはりこの体躯が原因なのか、歩道を歩いても避けるようにしてチラシは貰えなかった。だからチラツと見ることに出来なかったのだ。

顔に力を入れているから怖いのかと一旦無表情で歩いてみたが、逆効果だったようで更に避けられた。

思えば先ほどであった少女、インデックスは全然怖がった様子は無かったなーとか考える。

「……………いや、何故かガキには怖がられないんだよなー俺」

独り言で呟く。確かに怖がられるのは中学生〜大人の範囲で、小学生とかには怖がられたことの無い優璃。

他に居るとすれば、家族と友人関係を結んだ奴、それと喧嘩を売ってくる輩くらいだろう。

そんな事を考えているうちに、路地裏から出ていた優璃。向かいを見ると、道路越しにふれあい広場と書かれた立て看板が立てられていた。

道路を渡って広場に入るとそこにはバスが止まっており、多くの人…主に来年に入都予定の子供達で賑わっていた。

「うわー、うぜー」

子供は嫌いではないが人込みが嫌いな優璃は、溜息を吐いて新しく

オープンしたクレープ屋まで歩き、最後尾の列に並ぶ。

営業スマイルでメニューを手渡された優璃はありがとうございますと言って受け取り、何を頼むか思案する。

因みに、今の優璃はクレープという女の子を想像させる食べ物と見た目とのギャップで若干の視線を集めていた。

「（まあ二つ頼むとして。一つはスタンダードにバナナとチョコと生クリーム。もう一つは…は？ 納豆とかトッピングする奴いんのか？ 他には…漬物？ 豚バラとかパンバーグとかチーズとか…あ、別に甘くなくても良いのか。流石学園都市、やることが一味違う）」

勝手に一人で納得する優璃。しかし世の中不思議なもので、とある少女は生クリームと納豆をトッピングさせるといふ。

順番が回ってきた優璃はチョコバナナホイップとチーズハンバーグを頼み、商品を受け取る。

「（何このストラップ可愛い）」

ハンバーグの方を歩きながら食べ、ゲコ太ストラップを見る優璃。案外、こういうコミカルなキャラに弱かったようだ。

少し見惚れていると、正面から男の子がクレープを持って走ってきた。しかしそれに気付かない優璃。

「…あっ」

気付いた時には時既に遅し。優璃が咄嗟に少し身を引いたため男の子はぶつかつた衝撃で後ろに転倒することはなかったが、代わりに優璃のワイシャツがクレール弾頭の直撃を受けてグチャグチャになってしまっていた。

男の子は、ヤベエやつちまった！ と言った表情。

「え、あ、えっと……ごめんなさい！」

「……………」

あー、ワイシャツどうすつかない。滑り気ちやんと取れんのかな？ と、少し無言になって考える優璃。

涙目になって謝る男の子を見て、優璃はハンカチ（本物の虎の毛皮使用）をポケットから取り出そうとすると、不意に声を掛けられる。

「そこのお方」

振り返ると、そこには茶髪をツインテールで結んだ少女、白井 黒子が立っていた。

「……………俺か？」

「貴方しか居ませんわ。それより、そのまま動かないで下さいませは？ と眉を顰める優璃。良く見ると、黒子の腕には盾をモチーフとした腕章が付けられていた。

「ジャツジメント…？ 俺が何かしたかい？」

心当たりが全くない優璃は、怪訝な表情で黒子に問う。

「したかも何も、現に今その男の子を泣かせようとしているではありませんか」

「……………はあ？」

優璃は分からなかったと思うが、客観的に見れば優璃がぶつかった男の子を泣かせようとしているわけで。運悪く、本当に運悪く、男の子が走ってぶつかったところを見た人は、誰一人として居なかった。故に、この場に居る人全員が優璃が悪いと思っている。

「待て待て待て待て待て待てくれ。俺は別に何も」

ハンカチを取り出そうとポケットに入れていた手を出そうとすると、目の前に居た筈の黒子が突如として消えた。

そして気付いた時には、優璃はいつの間にか地面に伏せられていた。

「…え？」

初めての経験に戸惑う優璃。そして何となく察する。コイツは能力者だと。

というか風紀委員ジャツジメントの時点で能力保持者というのは大体分かるのだが。

ワイシャツに付着した生クリームと果実の苺が優璃の体重と背中に押し付けられている黒子の足の重みに押し潰され、嫌な感触が腹部

を襲つ。

「ちよ、テメ…ざけんな！ 俺は何もして」

ない！ と言おうとした瞬間、何か爆発する音が聞こえた。

すると優璃に足を乗つけていた黒子はすぐさま爆発した場所に向かい、もう一人の風紀委員ジャッジメントに警備員アンチスキルの要請を頼んで行ってしまった。

「え？ へ？ ……誤解の上に俺やられ損？ ってうわ、俺のチヨコバナナ…」

ムクリと起き上がり片手に持っていたクレープを見ると、あちこちに砂利が付いてて喰えるものではなくなっていた。

「あの、おにーちゃん…」

申し訳なさそうに男の子が言うと、優璃は一度溜息を吐いてポケットからハンカチを取り出して男の子の服に付いた生クリームを取ってあげる。

「今度からは、ちゃんと前向いて歩くんだぞ？」

優璃がそう言うと、男の子は駆け足で去って行った。

「さて…と」

自分のワイシャツに付いていた汚れも拭き取り、優璃は爆発の起きた方を見る。

どうやら爆発が起きたのは銀行だったようで、シャッターは爆発の影響でボロボロ。破片もそこから中に広がっていた。

しかし犯人と思わしき者達は既に一人やられており、今は発火能力パイロキネシスト者と対戦していた。

「さっきのガキは瞬間移動みたいのしてたし…ああ、テレポートか。で、もう一人は…パイロキネシストだったか？」

小萌からある程度能力の種類を聞かされている優璃は、脳みそをフル回転させて思い出して口にする。

口には出さないが、パイロキネシストとかガス代メツチャ浮くじゃん。つかテレポートって強過ぎだろ。とか思っている。

そんな結構どうでもいい事を思っていると、中学生と思わしき三人とバスガイドの女性が何かを探していた。

少し聞こえてくる「そっちは!？」とか、「ダメですー!」とか、「何処行つたのよもあー!」という会話から察するに、見学中の子供を探していると見た優璃。

優璃も何となく辺りを見渡すと、植えつけられた草むらから一人の少年が道路側に出て行ったのが見えた。

「あー、あれか？」

フライパンが入ったビニール袋を持ったまま男の子に向けて歩くようにすると一人の少女、佐天 涙子はもの凄い勢いで駆け出していた。

再び目を佐天から男の子に戻すと、男の子はいつの間にか犯人の一人に誘拐されそうになっていた。

「おいおいジャッジメント。ちゃんと潰しておこうぜ…」

優璃も駆け出し、犯人から引き剥がそうと男の子にしがみ付く佐天の元へと向かう。

「アア！？ んだテメ、放せよッ！」

「ダメー…ッ…！」

犯人の男は放れない佐天に嫌気が差したのか、男の子の手を放すと足を引き上げて蹴り出す動作をする。

「っ…！」

男の子を護るように抱き、ギュッと目を瞑って顔に来るであろう衝撃に備える。しかし、衝撃は全然来なかった。

「女を蹴ろうなんて、何考えてやがんだテメエ」

恐る恐る目を開けると、優璃が男の足を寸前で鷲掴みにして止めていた。

女子供には手を出さないというのが優璃のポリシーであり、どうもこうという女を平気で殴ったり蹴ったりする輩は結構苦手なようだ。

「なっ…！？ は、放せ！」

「ああ、今放す…、よっ！」

「うわっ！…、ガッ…」

優璃はある事か男の足を持ったまま力任せに一回転し、車に叩き付けた。

ドシャンッ！ という硝子が割れる音と車体が凹む音が聞こえる。

男そのまま気絶し、確認した優璃は佐天と男の子に話しかける。

「大丈夫か？」

「あ、え？ あ、はい！ 大丈夫、です。…えっと、ありがとうございませす」

「あー、いいっていいって。気にすんな」

そう言つと、タイミングよく警備員アンチスキルが到着し、事件は終結した。

ファクリティール6（後書き）

レールガンはぶっ放されませんでしたwww美琴涙目www片
手で70キロはある男を車に叩きつけるとか主人公身強過ぎ。親
父の紅きさんの方が一千倍強いですけどね 今回も才チが思い
つかなかった！ 感想その他諸々受け付けています

ファクリティーフ（前書き）

最新話でえす。今回から虚空爆発事件編ですかね。

フアクリティーフ

強盗事件が終結し、辺りは既に夕焼けに包まれている。

事件現場周辺には到着した警備員アンチスキルが仕切っており、現場処理に追われていた。

残っているのは警備員アンチスキルとその場に居た風紀委員第一七七支部の少女達。それと、その友人関係者の二人の少女と、

「……………帰りたいたい……………」

帰ろうとしたところを花を模した髪飾りを付けている少女に引き止められた、鞍嶋 優璃だった。

「（腹減ったなあ）」

結局洋風クレープ一つしか食べられなかった優璃の腹は常時空腹状態を保っており、心成しか全体的に小さくなっているようにも見える。事件関係者として引き止められた優璃は、警備員アンチスキルにどういう状況でどういう対応をしたのかとか、それに伴って怪我などはしなかったのかなどと聞かれた。

優璃の高校に通う教師である、黄泉川 愛穂に。

「黄泉川先生、副業はどっちなんですか？」

「ん？ アンチスキルはボランティアみたいな感じだから、副業でもなんでもないじゃん。本業は教師。まああれだ、見回りの延長線上に出来たのがアンチスキルじゃんよ」

ボランティアということは、当然給料は出ない。こうして見ると、アンチスキル警備員に所属している教師の面々は、余程学園都市内の生徒を護りたいと思っているのだろうと感じる。

「じゃ、確認するじゃん」

愛穂はそう言っつて、手帳に書き記した文を読み上げる。

「顔を蹴られそうになった少女を助ける為に男と少女の間に入って、蹴りを片手で止めてぶん回して車に激突させた…と。で、少女が抱えていた男の子にも鞍嶋に外傷は無し、と」

「うい」

能力者であるならば片手で人をぶん回して投げつけることは出来るが、普通の学生がやるとは信じ難い。

「（……………ま、体格からして出来ないこともないような気もするじゃん）」

優璃の体格を見て結論付ける愛穂。

「じゃ、もう帰っていいじゃん。くれぐれも寄り道はしないように」

「うい」

よっしゃー解放されたー家帰って飯喰うぞー！ と陽気な心で帰ろうとするが、世の中そんなに甘くはなく。

「お待ちになつて下さいな」

「…ハア、また俺に用かい。次は何の濡れ衣を着せるつもりなんだ？」

そう言つて後ろを振り返ると、苦い顔をした黒子が立っていた。

「っ……………、先ほどは、申し訳ありませんでしたわ」

と、突然平謝りしてくる黒子に戸惑う優璃。

「ちょ、待てつて。いきなり平謝りされても困る。凄く困る。取り敢えず顔上げてくれ、な？」

何とか頼み込んで頭を上げてもらう優璃。話しによれば、先ほどの男の子の件は優璃は無罪と言う事が男の子の証言によって示され、誤解とはいえ地面に這い蹲らせて背中を靴底で踏みつけたという屈辱的な行為を謝りたいと言う事。

流石に気にしなくていいの一言では片付けられないし、優璃もそこまで優しいとは思っていない。

「あんな、間違いはどんな人間にも起こることだからあーだこーだ言わないけどさ、一方的に悪いって決め付けるのは止めようや」

「そう、ですわね。…ありがとうございますの」

少し口調がきつくなってしまうたが、まあこれくらいでいいだろうと判断した優璃はそのまま帰ろうと…、

「どうしたの白井さん？ あれ、貴方」

したのだが、名前を呼ばれてないが足を止めて振り返る。

「あれ、確か昨日の…」

そこには、昨日不良に絡まれていた発育の良い（主に胸が）少女、固法 美偉がいた。

「やっぱりそうでしたか。鞍嶋さんですよ？ 昨日は本当にありがとうございました」

「ああ、いいっていいって。あのまま通り過ぎるのはポリシーに反するし」

そんな自然な会話をする優璃だが、内心では「やべーよ顔とか覚えてるけど名前が思い出せないよコンチクショー」と焦っていた。

元々人の名前を覚えるのが苦手な優璃は、もう会わないだろうと思っただ人物の名前は直ぐに忘れてしまうのだ。

「あの、お二人はお知り合いですか？」

若干蚊帳の外状態になっていた黒子が、優璃と美偉に問う。

「んー、知り合いというかなんというか。昨日不良に絡まれている

ところを助けてもらったの」

腕章忘れちゃってね。と可愛らしく微笑む。

「（っーかそろそろ帰っても良いだろうか。俺にも空腹の限界というものがあつてだな、そもそも筋肉を減らさない為には小まめに食い物を摂取しなければならなくてだな…）」

空腹のあまり脳内で筋肉について語りだす優璃。そろそろヤバイかもしれない。

「そうでしたの。鞍嶋さん…と仰いましたか？」

「ああ。鞍嶋 優璃。よろしく」

「私は白井 黒子と申します」

「うい。でさあ、俺はもう帰って良いの？ ていつか帰らせてくれるところとしては嬉しいんですけど」

蟹玉が俺を待ってるんだよ！ と今晚の夕食を思い浮かべながら（自分で作る）、優璃は腹を押さえる。

しかし空腹であると言う事に二人は気付かず。

そんな三人の所に、アンチスキル警備員に報告を終えた初春と、男の子の親御さんにお礼を言われていた佐天と美琴が集まった。

「固法先輩、アンチスキルへの報告終わりました」

「ありがと、悪いわね」

「黒子、アンタ何暗い顔してんのよ。って、この人は？」

「御坂さん、この人あたしを助けてくれた人です。あの、さっきはありがとございます」

そう言っ頭を下げて感謝する佐天。初春と美琴もそれを見て、反射的に頭を下げる。

「ああ、いいっていいってそういうの。俺が勝手にやったことだし。怪我がなければ、こっちとしてはありがたいよ。」

で、という接続語を付け、優璃は美偉を見る。

「もう帰っていいんですかい？」

「えーっと、そうしてあげたいのは山々なんだけど、ウチに来て報告書を書いてもらわないといけないの」

「……………報告書？ あれですか、どういう経緯でその事件に関わったのかどうやって手助けしたとかどうやって犯人を沈黙させたのかとかそういうことを書かなきゃいけないあれですか」

息を止めないで一言で言い切る。報告書：なんとも忌まわしい響きであろうか。

「大丈夫、ほんの三、四枚だから」

全然大丈夫じゃねえよ。と思う優璃。しかしここで断ったりして学

校に嫌な噂が流れたり、教職員やこつジャッジメントいう風紀委員に悪い意味で目を付けられては、今後の生業…というかコネ作りに支障を及ぼす恐れがあると考えた優璃は、

「……………ガスコンロとがあります？」

夕食を作って食べても良いという条件を付けて了承した。

場所はここから結構近いらしく、あとの現場処理は警備員アンチスキルに任せ、六人は風紀委員第一七七支部の拠点に向かった。

その間に自己紹介を交わし、優璃は若干フラフラになりながらも最後尾でガールズトークをBGMとして聴きながら、学区の風景も観察しつつ着いて行く。

しかしここで、重大なことを思い出す優璃。

「…あつ」

「どうしたんですか？」

「…材料買わないと」

買い物を終えて辿り着いたのは、ビルとビルに挟まれている二階建

ての小さめのビル。

看板には【JUDGMENT 177 BRANCH OFFICE】と記されていた。

「（案外小さいな）」

もっと拠点というから大きいイメージをしていた優璃だが、予想と違うのを見て拍子抜けしてしまう。というかどんだけデカイイメージをしてたんだらうか。

部屋に入る前に指紋・静脈、指先の微振動などをパターンチェックすると、カチンという音が聞こえた。

「（なにこの重警備）」

何しろ^{ジャッジメント}風紀委員には学園都市の総合データベースと呼ばれており、その中には^{ゴルキーパー}全学生のデータが揃っている。それをハッキングから守るために、^{ゴルキーパー}守護神という対ハッキング用凄腕ハッカーが存在する。

「ここが、私達第一七七支部の部屋よ。さ、上がって頂戴」

「失礼しまーす」

「おっじゃましまーっす」

「…お邪魔…します」

美琴・佐天・優璃の順番で挨拶をし、中へと入る。優璃は限界なのか声が途切れていたが。

中は案外広く、仕事用の机が四つ、応接用の空間があり円長型のテーブルを挟んでソファが二つ、そして台所は。

「台所狭っ」

元々仕事をする場所として建てられたものなので、台所は申し訳程度に設置されているだけだった。

「当たり前ですよ。元々料理するなんて考えられてないんです」

美偉の言葉に、それにしても範囲が一メートルちょっとしかないのはどうなの？　と思う優璃。

「まあいいか。じゃあ早速」

「報告書を書いてもらいますわね」

黒子の手には、いつの間にかA4サイズの報告書が。

「……………勘弁してくれよ……………」

一日は、まだ終わらない……………。

ファクリティーフ（後書き）

はい、ということでも最新話でした。

つか事件に関わらなかった。なんという…。

実は執筆開始から約一日経ってます。途中まで書いて部活行って帰ってきてまた書きました。次回こそは虚空爆発事件に入れると思う。多分。もしかしたら。

感想その他諸々待ってます。

ファクリティ―8 (前書き)

最新話です。頭痛いです。はい、どうでもいいですね。

ファクリティ―8

窓のないビルに窓はない。文字通りである。

中へ入るには空間移動能力者を会す必要があり、それ以外に入る方法はない。

なのに、だ。

数え切れないほどの大小のコードが複雑に絡み合う薄暗い空間には、生命維持槽の中に居るアレイスターの他に”能力者を会していない” もう一つの人影があった。

「呼んだ覚えはないのだがな」

「俺とお前の仲だろ？ 気にすんなって」

人影は身長を190は超える長身で、背広越しでも分かる完璧な筋肉美を誇っていた。

首から上の容姿は暗くなっていて分からないが、そこから見える” 紅い” 瞳だけが炯々としているのが嫌でも分かる。

男はアレイスターに馴れ馴れしい態度で接するが、当のアレイスターはいつものことだという感じで特に何かをするというわけでもなかった。

「それで、何の用だ」

男はアレイスターの質問に、んー？ と答えながらもポケットから煙草を取り出し、口に咥えて先端に高級そうなジツポライターで火を点ける。

ジツツ…という乾いた音が異様に響き、男は一度吸っただけで巻紙まきしと刻を全て灰に変え、フィルターだけが綺麗に残る。

「フウー……、まああれだ。」お願い” しに来たんだよ」

フィルターを携帯灰皿に入れ、ハンカチで落ちた灰を綺麗に拭き取る。

「ほう、何だ」

アレイスターは煙草を吸ったり灰を床に落としたことは咎めず、男の言った”お願い”とやらを聞く。

「詳細は纏めて”お前に”送っておいたから、それ見てくれ」

アレイスターはまたかと言いたそうな顔をするが、それもその筈である。

学園都市の各学区や出店に情報を送ることが出来ても（それもそれで難しいが）、学園都市の理事長でもあるアレイスター本人のバンクにアクセス、そして情報を一方的に送ることなど普通なら不可能である。そう、”普通”ならば。

空中に幾つものスクリーンが浮かび上がり、アレイスターは「お願

い！』という件名のデータを見つけ、読み出す。

「……………フン、良いだろう」

「流石クロ助。話しが分かる！」

内容を理解したアレイスターは”お願い”を了承する。男が言ったクロ助についてはスルー。

「用はこれだけか」

「うん？ えーっと……………ああ、そうだな。俺はこれからアラスカに行つてマウンテンゴートの毛皮取りに行かなくちゃならん」

マウンテンゴート…大きい個体で体長190もある巨大なヤギ。日本ではシロイワヤギと呼ばれており、主に山岳地帯の崖の上に生息する生き物。毛皮が使えるのかは知らない。

「ではこちらから質問だ」

「お、何だい？」

アレイスターの質問に、何故か嬉しそうな男。

「原石は大原石と成りえるか？」

「あー、どうだろうな。まあ遅かれ早かれ目覚めるさ。俺としても、早く目覚めて欲しいもんだよ」

やれやれ、といった感じで首を振る男。

「そのための”お願い”か、成る程」

「そゆこと。じゃ、俺はそろそろ行くな。あ、お土産買ってくるか？」

「いらん。自由に来られては邪魔だ」

「うわ、酷え。はいはい、邪魔者は消えますよーっと。じゃな、
世界で尤も魔術を侮辱した魔術師」さんよ」

「言われる筋合いはないな。『理を歪める最強の創造神』」

男はニヤツと口元を歪めると地面に向かって右手を横薙ぎに払う。

すると地面が人一人入れるほどの”裂け目”を作り出し、男はその中へと入って行く。

男が入ると同時に裂け目は閉じ、そこには傷一つ付いていなかった。

この空間に残っているのはアレイスターのみ。

彼はもう一度男が送ってきていた”お願い”を見る。

そこには、『鞍嶋 優璃を特例として風紀委員の特別単独行動班に
所属させる』と書いていた。

「……………特別単独行動班なぞないのだから」

要するに、作れ。ということだろう。一人の少年のために。

報告書を書き終え美少女五人と蟹玉を食べるというイベントを経験した優璃は、少し幸せな気分を夜を明かした。

そしていつも通り学校に行つて当麻と土御門と青ピとで雑談をする。

「だからな？ 俺が思うに銀髪紅眼キャラは最強だと思つわけですよ」

「ほー、ユウちゃんも案外そつち系いけるんだニヤー」

「ほなあれか？ もしかしてユウちゃんはニーソもいける口かいな」

「いいねニーソ。黒だねニーソ」

「この会話で優璃の人物像は崩れ去つたぞ？」

本当に下らない雑談であつた。

すると教室に、赤いランドセルにリコーダーが似合いそうな小学生——訂正、この学校の教職員である小萌が入ってきた。

「はいはい、HR始めるですよー。皆さん席に着いて下さいねー」
そして、いつも通りにHRを始める。

HRが終わると授業開始。一時限目は優璃の嫌いな英語。二時限目は日本史。三時限目は古典。そして、四時限目が優璃の一番嫌いな能力についての授業。

一生懸命ノートを取っていたものの殆ど頭の中に入らず、終盤は目を開けたまま寝るといふ高等技術を使用した。

そして授業が終わって放課後、帰りに何か食べて帰ろうという話になり盛り上がっていると、優璃が小萌から呼び出しを食らった。

悪い、ちょっと行ってくる。と言って職員室に行く優璃は、何かしただろうか？ と考えながら向かう。

職員室に入ると、小萌から封筒を渡された。

「？ 何すかこれ」

「あれ、聞いていないのですか？ 優璃ちゃんは昨日犯人を捕まえた（捕まえたとは言わない）その度胸と力を称えられて、ジャッジメントにスカウトされたのですよー？」

優璃の暫しの沈黙。そして。

「……………はあ!？」

他の教職員が五月蠅そうな目で見ているが気にせず封筒を破いて中

身を見る。

そこには、『鞍嶋 優璃を第七学区、ジャツジメント第一七七支部に所属させ、”特別単独行動”の権利を与える。 学園都市総括理事会』と記されていた。

「…月詠先生、”特別単独行動”って何ですか？」

「先生も聞いたことがないので友人を通して上層部に聞いてみると、要はいつでも自由に動けるジャツジメントということですね」

出勤時間に決まりがなく、時間の拘束も無くなるということ。一番の利点は上の命令などを待たずとも、自分の好きなように行動できるといふところか。

「でも、なんでこの学校のジャツジメントに所属じゃないんですか？ 普通各学校内に所属ですよね？」

「そこら辺は分からないですよ」

そう言っつて、小萌は少しシヨボンとした顔をする。

「あ、いや、良いですよ。別に先生が悪いと言う訳でもないんですし。それで、この支部には今日行けばいいんですか？」

しかし優璃が少し慰めると忽ち元たちまに戻り。

「はいですつ。先生は優璃ちゃんを応援するですよ！」

何を応援するのは分からないが取り敢えず把握した優璃は職員室

を出て、外食を断って昨日も赴いた風紀委員第一七七支部へと足を運ぶ。

道を覚えるのは得意なので迷いはしないが、そんなに急ぐことでもない。地理把握も兼ねて再び路地裏へ。

相変わらず昼間だというのに薄暗い路地裏には、踏まれて歪んだ空き缶や虫食いのあるバケツが転がっていた。

ここからは見えないが近くでニャーという可愛らしい鳴き声が聞こえたので、恐らく近くに猫がいるのだろう。断じて金髪でアロハシヤツ着ててハーフパンツ履いてるグラサン野郎の声ではない。断じてない。

大分道筋を把握出来たので路地裏から出ようとすると、T字路の出口の反対側：左から何か争っている声が聞こえた。

そっつと見てみると、眼鏡を掛けた高校生の男子が三人に壁まで追い詰められながら殴られたり蹴られたりしていた。

別に助ける義理は無いのだが、ジャッジメント風紀委員に入る以上見逃してはいけないと思ひ（性格的にも見逃せない）、声を掛ける。

「おいやめろよ。複数でしか弱い奴を虐げられないクソ野郎共」

「アアン？ ンだデメエ？」

「オメエ誰に口聞いてつか分かってんのか！？」

「ぶっ殺してやるよ！」

何とも血の気が多い奴等である。

優璃は短く溜息を吐くと襲ってきた一人の顔面を靴で殴り（教科書・ノート・資料・筆記用具入り。重量五キロ）、壁に叩きつける。

「ハッ！ 無能力者風情が調子に乗るなよ！！」

そう言って金髪の男は手を前に突き出し、なにやら集中し始める。

「うっせ」

がしかし、優璃は一切待たないで靴を投げて隣にいたモブを沈黙させる。と、ひとつ飛びで（三メートル弱）金髪の目の前まで迫る。

「なっ！？」

「生憎、俺は正義の味方が変身するのを待たないんだよ」

突き出した手を絡めるようにして掴み取り、グイッ！ と思いつき引き寄せ、鳩尾に膝蹴りを喰らわせる。

「ゲッ……ハ、あ……」

そのまま口から泡を吹き出して気絶する金髪を尻目に、優璃は絡まっていた男子生徒を見る。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……大丈夫です。ありがとう、とう」

「どう致しまして。あんまりこういう所通らないほうが良いぞ？
また絡まれるかも知れないからさ」

「こ、今度から気をつけるよ。じゃ、じゃあ、これで」

そそくさと逃げるように去っていく男子生徒。

まあ俺が対応すればこんなもんだわな、と思う優璃。

「さてと、俺もそろそろ行かないと拙いかな」

歪に凹んだ鞆を持ち、路地裏から出る。

そこで、あーそういえば昼飯買わなくちゃならなーとか思い、
路地裏から出てすぐ右に陣取っていた【GREEN MART】と
いうコンビニに入る。

店員のおじさんの朗らかないらっしやいませーという声を聞き流し、
弁当コーナーに立ち寄る。

「今日は暑い。つか今日”も”暑い。ここは冷やしラーメンか？
それともいつも通り(学園都市外の時)に唐揚げ弁当にしようか
……………よし、どっちも買おう」

悩んだ意味はあまり無かった。弁当を二つ籠に入れ、続いては飲み
物コーナーに寄る。

「(何を飲もうか…ん?)」

しゃがんで下段の飲み物を見ると、棚の下にちょこんとピンク色の布生地が目に入った。

引っ張り出してみると、それは可愛らしい兎のぬいぐるみであった。

「（誰かの落とし物…？ それとも故意で置いてんのか？）」

取り敢えず怪しいので元の場所に戻そうとした時、おじさんの店員が戸惑った様子で何かを話しているのが聞こえた。

ぬいぐるみを手に持ったまま立ち上がって見て見ると、ジャッジメント風紀委員が来ているのが見える。

「あ、あの…ウチの店で何か…？」

「この付近で、重力子の爆発的な加速が観測されました」

「じゅっ…？」

「この店に、爆弾が仕掛けられた恐れがあります」

「ば、爆弾!？」

その”爆弾”という単語に、店内にいた客は弾き出されるようにして店の外へと出て行く。

イマイチ状況が飲み込めない優璃は、”爆弾”という単語を聞いても然程焦った様子は見せなかった。

「おいアンタ早く避難しろ！」

男子生徒の風紀委員ジャッジメントに怒鳴られながら言われた優璃は、手に持ったぬいぐるみを戻してから出ようと考えていた。

「あいあい。今出…？」

しかし、それは遅すぎたかもしれない。

左手に持っていた兎のぬいぐるみが突然震えだし。

「え…まさか」

メキメキメキ…という音を立てながら、凝縮されたいった。

直感で感じる。これが”爆弾”なのだ、と。

「ちいッ！！」

爆弾を投げ捨て、少しでも離れさせるように風紀委員ジャッジメントを後ろへ蹴る。

凝縮は止まらず、既に残っているのは頭のみ。そして優璃との距離は、僅か一メートル弱。

「伏せーッ」

ろ！ という言葉は紡がれず、代わりに響き渡ったのは爆発の爆音であった。

「奇跡ですわね」

白井 黒子は驚愕を遙かに飛び越えて呆れの域まで来ていた。

自分の目の前にいる顔面包帯だらけの筋骨隆々男子高校生：鞍嶋優璃にだ。

優璃は生きていた。本当に奇跡的に。顔面の所々を火傷し、両腕には硝子の破片が突き刺さった為幾つもの瘡蓋かさぶたが出来ていた。

「いや、マジで焦ったね。まさか俺が持つてる兎のぬいぐるみが爆弾とは思わないだろ。こんな軽症で済んだのは筋トレしてるお陰だな！」

まだ頭の整理が出来ていないのか若干テンションが高い優璃。

現在の場所は第一七七支部のビルの中。

爆発を間近で受けても大丈夫大丈夫と言って、鞆を持って路地裏を通って人目に付かないように一七七支部へダッシュ。

ノックをして開けてもらうと、優璃の顔を見た初春は突然後ろに倒れて気絶。続いて黒子も「にぎやあああああああああつ！！！！？」という乙女に相応しくない絶叫を上げながら気絶。

それはそうだろう。扉を開けて突然顔面火傷の男を目にすれば、誰でも恐怖に駆られて本能的に意識をシャットダウンするだろう。

優璃は二人をソファーに寝かせ、痛む火傷を我慢しながら救急箱を探し出し、自分で鏡を見ながら応急処置を施す。

そして黒子が目を覚まし、事の経緯を説明。黒子が他の風紀委員にジャッジメント色々報告して今に至る。

「幾らトレーニングしてもこんな軽症で…いや、充分重症ですわね」

「あ、悪いけど軟膏全部使わせてもらったから」

「別に良いですけど…」

「つか行かなくていいの？」

「初春が目覚めない限り、私がここを離れるわけにはいきませんの。初春は私のバックアップですから」

「へーそーなのかー、と返事をする優璃。…はて、何かを忘れている気が…、とここで思い出す。」

「あ、そうそうと言いながら若干焦げた鞆を開けて一枚の茶封筒を取り出して黒子に渡す。」

「何ですか？」

「放課後に先生から渡された。なんかジャッジメントに入ってこの支部に所属し、特別単独行動の権利を与えるってさ」

「これは…確認を取っても？」

「ああ、いいよ」

黒子はなにやらパソコンをカタカタと動かし、この手紙の内容が本当なのかどうかを確かめる。

「特別単独行動…ありましたわ」

やはりその単語が気になっていたのかと、優璃は思う。そして納得したのか、黒子はソファアームに戻ってきて再び座る。

「確認が取れましたわ。色々と聞きたいことはありますけれども、恐らく貴方は答えられませんかでしょう？ まあ既に顔見知りと言う事であまり抵抗もありませんし、人員も欲しいと思っていたので大歓迎ですわ。よろしくお願いしますね、鞍嶋さん」

「おう、よろしくな」

ミイラ男、もとい優璃は軽く手を挙げる。

暫くしてから初春が目覚め、優璃の顔を見るなり再び気絶しそうになる初春何とか起こしてこれまでの経緯を説明し、優璃は早速今回の事件、クラッシュ虚空爆破事件の詳細を聞かされる破目となった。

ファクリティ―8（後書き）

爆”発”じゃなくて爆”破”でしたね。今さっき気付きました

主人公は銀髪紅眼黒ニーソが好きです。作者も好きです。ロリ”でも”最高です。

感想その他諸々待ってます。

フアクリティ―9 (前書き)

最新話です。今日はさとりとこいしのDOKIDOKIDONDI
SKとさと恋とあゆるたんのふぁんたぢっく買いました。はい、今
回もどっでもいいですね

フアクリティ―9

学園都市へ行けば、僕の人生が変わるかと思った。

そう思ったのは小学生の頃。親に強請ってこの学園都市へと入都した。

これで僕も能力者になれる。いや、超能力者になれる！ そう、思っていた。

しかし、審査員に告げられたはたった一言。

『君はレベル0の無能力者です』

嘘だと思った。嘘だと信じたかった。嘘だと…叫んだ。

ここに入れば誰でも能力者になれると思っていたのに！ 気の弱い自分を変えられると思ったのに…！

…でも諦めなかった。まだ小学生だ、時間はまだある。そう信じて。しかし既に時は十年も経っている。その十年の間に頑張って頑張ってレベル0ではなくなったものの、それでも能力値はレベル2…日常にも何にも役に立たない異能力者程度。

こんなんじゃない、もっと強大な”力”が欲しかった。もっと”力”を持っていれば、僕は…あんな奴等なんか…！！！！

高校に入ってから僕は不良に毎日のように絡まれ、カツアゲされ、暴力を振るわれていた。

僕はレベル2なのに、どうしてレベル0の無能力者なんか馬鹿にされているんだ！

そつだ、それもこれもジャツジメントが悪い。何がジャツジメントだ、ふざけるなッ。

僕が絡まれている時に何で奴等が水をぶちまけた廊下を総動員で掃除してるんだよ！ お前等が掃除するのはそこじゃないだろう！！

だから僕はジャツジメントに復讐する。無能なジャツジメントなんていらぬ。今や”レベル4”になった僕の能力で掃除してやる。

そつだ、僕を救わなかつたジャツジメントなんていらぬ。僕を救えるのはジャツジメントやアンチスキルなんかじゃない、僕自身だ…。

「ぐあゝゝゝ、終わったあ…」

席に座りながら背筋を伸ばしたと思うと軟体動物のように机に突っ伏すのは、顔に包帯を巻いてるミイラ男…鞍嶋 優璃。

今日も後半が意味の分からない授業だったが、それを乗り切った優璃は目を閉じながら勘で荷物を纏める。

学園都市でも流石に顔面包帯は珍しいようで、いつもより視線を集めていた。

朝登校して教室に入ると女子の半数は見た瞬間に悲鳴を上げ、教室に笑顔で入ってきた小萌はそのまま硬直してHRが少し遅くに始まった。

経緯を説明すると、ジャッジメント就任おめでとーという一言で呆気無く話題は終了。

「優璃ー、一緒に帰ろうぜー」

「うーい」

当麻の掛け声に力なく返事をして当麻と共に教室を出る優璃。

当麻の住んでいる寮のマンションと優璃の住んでいる寮は同じだ。

朝は優璃の方が早く出ているので一緒に登校はしないが、帰るときは偶に一緒である。

部屋も当麻の部屋の隣の隣：寮には土御門も住んでおり、この場合優璃の部屋は土御門の部屋隣の隣にある。因みに土御門のもう一つの隣は当麻だ。

「いやーもうすぐ夏休みだねー。優璃さんは何か予定でも作ってる

「んですかー？」

「そだねー。まあ取り敢えず実家帰って部屋の掃除して、少しノンビリしてから帰る予定。上条さんはー？」

「あー、どうすっかなー。…あ、そうだ海行かないか？ 土御門とか誘ってさ」

「お、いいねー」

もうすぐ訪れる夏の大イベントの一つ、夏休みに思いを馳せる二人それから夏休みになったら何をするかとか何をしたいかなど話し合う。

そして寮まであと少しという所で、挙動不審で髪を玉ゴムでツインテールにした小さな少女を発見した。

手には第七学区の地図が広げられており、しかし少女の顔は今にも泣きそうなほど困っている。

「おい優璃、あの子」

「ああ、大方迷子だろうな。行ってやれよ」

「いや、お前ジャッジメントだろ？」

「あ、そうだった」

思い出したように優璃は鞆から新品の風紀委員の盾をモチーフとしたマークが入った腕章を取り出し、腕に付けずにワイシャツの裾に

取り付ける。

特に意味は無い。強いて言うならば半袖のワイシャツに付けにくかったのだろう。

「どうしたの、お嬢ちゃん」

優璃が優しく声を掛けると、少女は一瞬目を見開く。

「（あ、顔面包帯してんじゃん俺）」

あちゃーやっちゃったー、と目を掌で覆う優璃だったが。

「えと、おにーちゃん…だれ？」

「ん？ あ、ああ。ジャツジメントだよ。君が困ってそうだったから声を掛けたんだけど…ごめんね、こんな怖いお兄ちゃんです」

「ジャツジメント？ あ、ホントだ！」

裾を見て優璃が風紀委員の一員だと分かると、少女は先ほどの怯えたような表情から一変して、ニコッと笑う。

話を聞くと、どうやらセブンスミストという洋服店に行きたいのだが、地図を見ても場所が分からなくて困っていたらしい。

「セブンスミストセブンスミスト…あー、はいはい。あそこね」

学園都市外でも多くのチェーン店を構えている洋服店なので、ここら辺の地理を思い出して道筋を確認する。

「おい上条ー。これからセブンスミスト行くんだけどお前も来るかー？」

「いいのか？」

「俺みたいな怖いミイラ男と一緒にいるより、お前みたいなウニ野郎と一緒にいたほうがいいだろ」

「それ褒めてるんですか貶してるんですか」

「勿論侮蔑」

「もつと酷いわー!!」

そんな下らないやり取りを見て笑う少女。三人は笑い合いながら（主に当麻弄りで）、目的のセブンスミストに向かった。

「そういえば優璃。お前ジャッジメントなのに普通に帰っていいのか？」

「ああ、俺はな。何か特別単独行動の権利ってーのを持っててさ、それ持ってつとジャッジメントとして自由に行動できるんだとよ」

「何だそれ？ 何かお前だけ特別だな」

「だよなー。何か裏がありそうだけど…別に気にすることでもないだろ。今の生活を完全に崩すわけでもないし」

「おにーちゃんたち、なにムズカシイおはなししてるの？」

「ごめんごめん。このウニ頭のお友達がゲームしたいって五月蠅くてね」

「ウニ頭言つな!」

「これが逆ギレってやつだよ。君はこんな風にならないようにね?」

「うん!」

「(……………不幸だ)」

そんなこんなでセブンスミスに到着。ここに来たかった理由を聞くと、昨日見たテレビのモデルのように綺麗に御洒落がしたかったらしい。

「俺もピンクのフリル着たりして御洒落する!」

「やめれキメエ」

「さ、まずは何処に行きたい?」

「んーつとね、……………あっち!」

「って私のツッコミはスルーですか!??」

「はいはいワロスワロス」

解せぬ、と不承不承と言いたそうな表情で少女の後に着いて行く優璃の隣を歩く。

まずは一階を見て回ったが、殆どが高校生などを対象とした大きな服で御洒落はせず。

「この階に無かったら……五階にキッズ洋服店とかもあるし、そこちに行ってみようか？」

「うん！」

セブンスミストの案内板を見てからエスカレーターに乗り、目的の五階までノンビリと昇る。

五階に着くとキッズ洋服店に立ち寄り、少女の御洒落タイムが始まる。

「へー、この階って全体的にサイズが揃ってんだな」

「パジャマから水着から下着までな。この空間はレディースコーナーだぞ？」

「もしかして、男の俺等って場違い？」

「いいんじゃないの？ あの子の相手してれば変な目では見られねえだろ。お、似合うねーその服！」

「ホント!?!」

「おう、まるでアイドルみたいだよ。な、上条」

「ああ、そこら辺にいるアイドルより可愛いよ」

「えへへー」

顔を赤くして照れる少女。遠くから見れば二人ともロリコンにしか見えない。

「……………っ！」

「ん？ どうした優璃？」

突然震えだした優璃に、当麻は尋ねる。

「悪い、ちょっとトイレ行って来る」

唯の尿意だった。紛らわしい。

「何だよ。じゃあ俺とあの子はここで待ってた方がいいか？」

「いや、この階でなら動き回っていいぞ。あの子もキッズの所だけじゃつまんだらうしさ」

「分かった。ゆっくりしてこい」

「あの子一人にしないように気をつけるよー？」

そう言って別れる二人。

優璃は歪なダッシュでトイレへと向かい、当麻はキッズ洋服店から出てきた少女と共に違う場所へ移動する。

「ふう〜、結構ヤバかった」

トイレに行く為に若干内股になりながらダッシュした優璃だったが、思いの外トイレが見つからなくて焦っていた。

非常階段の近くにあったのだが、全く気付かずに通り過ぎていて気付いたのが三往復くらいした時だ。

鞆を洗面台の端に置いて手を洗っていると、携帯がブルブルと振動する。

優璃は手をハンカチで拭いてからポケットから携帯を取り出し、耳に当てる。

「はいもしもし」

『鞍嶋さん！ グラビトン事件の続報ですの！』

相手は黒子であるが、何か相当焦っていた。

「ん、それで？」

『第七学区のセブンスミストで爆発的な重力子の加速を観測いたしましたの！ 今何処に！？』

「セブン…って、俺が今居る所じゃねーか！ 避難は」

言うよりも早く、店内には混乱を招かない為か電気系統の故障と称

する放送が流れ、客は文句を言いながらも静かに避難していく。

『貴方もですよ！？　そこに初春も居る筈です、探してくださいですの！　爆弾魔の狙いは恐らく初春です！』

「初春さんが！？　分かった探してみる！」

通話を切り、優璃は鞆を持ってトイレから弾き出される様に駆け出す。

無駄に広い洋服店だが、今は客が居ない為人を探すのに苦労はせず、すぐに見つけられた。

「初春さん！」

「え？　あ、鞍嶋さん！？　どうしてここに」

「色々あつてな。それよりも聞いたと思うが、お前が狙われている。避難するぞ」

「え、ちょ」

初春の腕を掴んでエスカレーターに向かおうとする優璃だが、後ろからあの少女の声が聞こえた。

「おにーちゃんー！」

「あの子……」

「クソッ、まだいたのか！」

初春に、先に行け！　と言って少女に駆け寄る優璃。

「何してる、早く避難するぞ！」

「でも、めがねをかけたおにーちゃんがこれをフーキインのおねーちゃんに渡してって」

少女の抱えているものを見てみると、その手にはカエルと思わしきぬいぐるみが持たれており……。

「いた！　おい優璃！……」

「えっ、鞍嶋さん！？」

後ろからは当麻と美琴の音が聞こえる。

重力子……爆発的な加速……セブンスミスト……ぬいぐるみ……標的……
ツ……！！

優璃は少女からぬいぐるみを奪い取り、前方へと思いつきり投げる。

「離れる！　あれが爆弾だ！」

少女を抱き上げて立ち上がり、後方へダッシュ。

「レールガンで爆弾ごと吹き飛ばすッ……！」

しかし神の悪戯か。ポケットから取り出そうとしたコインは手を滑り落ちて重力に従って落下する。

「（しまっ……ッ！）」

ぬいぐるみは既に手足しか残っていない。

「上条！！」

「任せる！！」

入れ替わるようにして当麻が優璃を抜き、自ら前に出る。

優璃はそのまま、目を閉じて固まっている初春と冷や汗を流す美琴を少女と一緒に抱え込み、当麻に背を向けるようにして三人を護る。

そして当麻が右腕を突き出した瞬間、爆弾が爆発した……。

ドン！！ という硝子が割れる甲高い音と共に、周囲に爆発音が響き渡る。

その光景を見ていた眼鏡を掛けた少年……かいたび介旅 初矢は満足したようにセブンスミストを目に収め、不敵な笑みを浮かべながらその場を離れ、路地裏へと入り込む。

「（いいぞ、いいぞッ、スバラシイ！ 徐々に強い力を使いこなせ

る様になってきた。…ク、ククク………クハハッ！」

そして曲がり角を曲がり姿が見えなくなると、介旅は思うままに口にする。

「もうすぐだ！ もう少し数をこなせば、無能なジャツジメントも、あの不良共も…見てろよ、みんな纏めて吹き飛ばアツ……！！？」

突然背中を蹴られた介旅はゴロゴロ転がってゴミ箱に激突し、辺りに紙屑や空き缶などを散らばす。

「ぐ…、一体何が…？」

「はい 用件は言わなくても分かるわよねえ、爆弾魔さん？」

背中を蹴った張本人は、学園都市のLEVEL5の一人である御坂美琴。

”爆弾魔”という単語を聞くと、介旅は動揺する。

「な、何のことだか、僕にはさっぱり…」

「まあ確かに威力は大したもんよねえ。でも残念、死傷者どころか、誰一人掠り傷一つ負ってないわよ」

「なっ…そんなバカな！ 僕の最大出力だぞ！！」

「ほーっ」

見事に美琴の術中に嵌った介旅は自らボ口を出し、既に遅いと分か

ついても何とか言い訳をしようとする。

「い、いや。外から見ても凄い爆発だったんで、中の人はとても助からないんじゃないかってえッ……!!」

バックからアルミスプーンを取り出し美琴に向かって投げつけようとした瞬間、そのスプーンを超電磁砲レールガンが撃ち抜く。

「と、常盤台のレールガン……、ハハッ、今度は、常盤台のエース様か……。いつもこうだ。何をやっても…力で地面に、捻じ伏せられる」

介旅は衝撃で倒れた身体を起こし、美琴を睨みつける。

「殺してやるッ!! お前みたいな奴が悪いんだよ! ジャツジメントだってッ、力のある奴なんてのはみんなそうだろうがああ!!」

介旅は叫ぶ。己の自己を押し付けていようとも、それでも、叫ばずにはいられない。

そんな彼に、美琴はゆっくりと歩み寄り。

「うぐうっ」

「歯を食いしばれえ……!!」

片手で介旅の襟を掴み上げ、渾身の一撃を顔面に見舞う。

「チカラチカラって…ッ。……常盤台中学のレベル5は元はレベル1だった。それでもそいつは頑張って頑張って…挫けそうになって

も、諦めないで頑張つて、レベル5と呼ばれる”力”を掴むことが出来たのよ。……ま、”チカラ”に依存したアンタに言っても、分からないでしょうけどね」

美琴はそれだけ言つと踵を返し、路地裏から出て行く。

そして美琴と入れ替わるようにして、優璃が歩み寄ってくる。

「ア、アンタは……」

「どうだ、年下にヤキを入れられた気分は」

尻餅を付いている介旅の前まで行くと、優璃はその場にしゃがむ。

「ハ、ハハ。何だ、僕をぶん殴りに来たのか。力があるから……ぐっ……力があるから僕みたいに弱い奴を痛めつけるんだろうッ……」

「弱い？ 俺にとっては充分脅威だね。俺はお前のせいで顔面に包帯巻いてんだよ。弱い自分を痛めつけるのが許せない？ ……ふざけんじゃねえッ……」

優璃の怒号が、路地裏に重く激しく反響する。

嫌な汗が全身から噴き出す感覚と、内臓全てを鷲掴みにされたような感覚に陥り、息が荒くなる。

「テメエのくだらねえ自己満に關係ねえ奴を巻き込むんじゃねえ！ ジャツジメントが憎い？ テメエを虐めて来た奴等が憎い？ あー結構だ。……だからってなあ、罪の無い人間を……殺して良いことにはなんねえだろうが……」

そこから捲くし立てるように、

「テメエのしようとしてたことはその不良共と同じなんだよ！ 罪も無く何も知らない人間を痛めつけようとしてたんだ！ テメエの狙いは俺等ジャツジメントだろ！？ 何でそこにあの子を巻き込みやがった！ あの子が何かしたか！？ テメエを痛めつけたか！？ テメエをバカにしたか！？ 何にもしてねえだろ！！」

つまり、優璃が何を言いたいのかというと、

「他人にテメエの我儘を押し付けてんじゃねえッ！！！！」

ただ、それだけのこと。

優璃は立ち上がり、路地裏から出る。

それを待っていたように、黒子が空間移動テレポートで介旅の目の前に現れると、手にしていた手錠を介旅の両手首に掛けた。

ファクリティール9（後書き）

結局主人公は何を言いたかったんだ？　なんか書いてるうちに分からなくなってきたから変かも。その場合具体的な指摘をお願いします。

感想その他諸々待ってます。

ファクリティ―10

「レベルアップ？」

『はい』

夏休みがあと一日まで迫ってきた今日。恐らく支部にいるであろう黒子から、珈琲牛乳を飲みながら次の授業の為に英気を養っている優璃に電話が掛かってきた。

どうでもいいが、顔面ミイラの男が珈琲牛乳を飲んでいるのは実にシユールな光景だ。

『レベルアップの詳しいことは分からないのですが、噂によれば”使用しただけで能力のレベルが上がる”んだとか』

レベルアップ
幻想御手…学園都市内で噂されている都市伝説の一つであり、内容は黒子が言ったとおり”使用しただけで能力値が上がる”というもの。

レベルアップ
幻想御手がどのような形をして、どのようにして入手出来るかは不明だが、ネットの書き込みでは幻想御手を使用したと思われるコメントが数多く存在する。

まあ、それが本当に使ったという保障はないのだが。

「そらまた珍しい……………んじゃま、一応俺も協力する方針で動くわ。

悪いな、もうすぐ授業始まるから切るぞ？」

『承知しましたわ。お忙しい所失礼いたしました』

「あいよー」

携帯を耳から離し、ポケットに仕舞う。

しかし協力するとは言ったものの、主に何をどうすればいいのやら…と考える。

地道に情報収集という手もあるが、恐らく聞いた所で噂以上のことは分からないだろう。それに風紀委員^{ジャッジメント}だって動いてるのだ、一人で情報収集したってあまり意味が無い。

当麻など、友人に個人的な協力を求めて調べるといふことも選択肢としてあるにはあるが、出来れば巻き込みたくは無い。

ならば一人で幻想御手関係者にコンタクトを取ってみるか…。

「（…いや、それは危ねえか）」

考えてみれば、優璃は無能力者なのだ。機転を利かせれば能力者とも渡り合えるだろうが、相手が複数となれば話は別だ。

能力無しの喧嘩のみならば、相手がナイフや金属バットなどの凶器を持っていようが、まだ勝ち目はある。拳銃とかなら危ないが。

炎を出す能力者を相手にするより、ナイフを持っている相手の方が対処はしやすい。

優璃個人の考えだが。普通の学生はどちらでも大半は逃げる。

「（あれ？ 俺に出来ることって全然無い？）」

あるえー？ と若干しゃくれ顎になりながら珈琲牛乳を飲み干し、ゴミ箱に紙パックを捨てる。

「（明日から夏休みだし、時間はたっぷりあるからノンビリやるかー）」

結構楽観的な優璃はそう判断し、残り二時間の辛い辛い最後の授業をこなしていくのであった。

そして放課後。…を飛び越して既に夕飯時。

無事に今学期最後の授業を終えた優璃は、高校生活初の夏休みということで突入記念として当麻と共にファミレスに来ていた。

因みに、優璃は補習対象者ではなかったが、当麻は”記憶術”^{かいほつ}の単位が最悪だったので（他にも数学がヤバイ）夏休みも一週間ほど学校に行つて授業をするんだとか。

「はあ……………不幸だ」

「まあ元気だせつて。今夜は俺が奢つてやるからさ」

「優璃……」

まるで神様でも見るかのような瞳で見てくる当麻を「きめえからさ

つさと決める」の一言で一蹴。

店員を呼び、メニューを注文。

「じゃあ俺は苦瓜にがつひと蝸牛かたつむりの地獄ラザニアで」

「ハンバーグステーキの四〇〇グラムとライスの大盛り、それからペペロンチーノとイカの箱舟EXを」

かしこまりましたー、と言って厨房に帰っていくウエイトレス。

「喰いすぎじゃねえか？」

「足りないくらいだ」

まあそのガタイだと普通と考えるべきか…などと考えを巡らせる当麻。

そして夏休みの予定を色々と話していると、優璃の視線の端に見慣れた姿が映った。

灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターという極普通の服装。ある意味で普通じゃないとすれば、それは名門校の常盤台中学の制服だということであろうか。

「（……………何やってんだ？ あれ御坂さんだろ）」

身体を少し通路側にズラして良く見てみると、そこには常盤台のエース、御坂 美琴がガラガラの悪い男三人と何か話していた。

「？ 何見てんだ優璃」

そんな優璃を見て疑問に思ったのか、当麻も後ろを覗くようにして身体を通路側へとズラす。

「おい、あれ絡まれてねーか？ しかも相手は常盤台の……げっ、ビリビリじゃんか」

美琴を見ると、何故か面倒そうな顔をする当麻。

「知り合いか？ ……って、そっぴや昨日一緒にいたな」

「六月頃にちよっとな……。俺の右手はあらゆる異能の力を消せるっ
てのは教えたよな？ それでビリビリの電撃を消したらそれから勝
負勝負五月蠅くて……」

イマジンブレイカー
幻想殺し…当麻の右手に宿っている謎の力。効果範囲は手先から手
首までだが、異能の力であれば悉く消^{くごとく}してみせるトンデモない代物
因みに当麻の身体全体を対象にする能力（空間移動など）も効かな
い。

「はー、通りで疲れて帰ってくるわけだ。で、どうすんの？ 助け
に入んの？」

「入るよ。ちょっと席外すな」

「ひい」

そう言って立ち上がり、美琴と男達の所に歩いていく当麻。

別に美琴を”助けようとしているのではない”。当麻は男達を”助けようとしているのだ”。

「（レベル1、2程度がレベル5に勝てるわけねーだろ。仮にレベル4あったとしても、御坂さんには勝てないと思うし。あいつ等頭悪そうだし）」

例外にレベル5の美琴を相手にしても一応勝ち続けている上条 当麻という人物はいるが。

奥で何やら言い争っているのが見えるが、優璃までは距離があって聞こえない。

「……………げっ」

しかしまさかである。トイレから三人のお友達であろう男達がゾロゾロと出てきたのである。合計九人である。

「ええー！ツッ!? トイレに集団でゾロゾロは女の子の特権だと思っただけがーツッ!?」

「（集団でトイレとか、むさ苦しいだけだろ）」

離れていても聞こえてくる当麻の絶叫に、優璃は内心で同意する。

そして逃げ出す当麻。それを追う様にしてゾロゾロと店を出て行く男達。

結論、優璃は一人残された。

「…いや、金は俺持ちだからいいんだけどさ」

店員が美琴に対して大丈夫ですかと確認すると、美琴は大丈夫だと言つて「お会計はこの子が全部払います」と優璃の丁度死角にいる人物に手を置き、店を出て行く。

少し気になった優璃がその人物を見てみると、そこにいたのは黒子であつた。

「白井さん？ 何してんの？」

「あら、鞍嶋さん？ 貴方こそどうして」

「ダチと飯喰いに来たんだけどさ、色んな人連れてどっか行つたよ」

「はあ、そうですね…。私はお姉さまを…あらいない」

「御坂さんなら店出て行つたぞ？」

「お姉さまつたら…」

美琴を探す為に店を出ようとする黒子だが、優璃は幻想御手レベルアップについても少し聞きたかつたので、申し訳ないと思ひながら黒子を引き止めて話をしてもらうことにした。

「成る程ね。だから御坂さんがあいつ等と話していたと」

運ばれてきた大量の料理を食べながら、先ほどまでの経緯を聞き、

それを頭の中で整理する。

ネットでの書き込みを元に、レベルアップ幻想御手を使ったと思われる者達からその情報を聞き出すのが目的だったらしいが、それは失敗に終わった。

「（あれだな、完璧に上条のせいだな）」

あいつあんなところに入ってなければなーとか今更ながらに思うが、思ってたって仕方が無い。

「鞍嶋さんの方は、何か有力な情報は入りましたの？」

「残念ながら収穫はゼロだ。（だって何も調べてねーし）」

「そうですの…。」

「まああんまり根詰めすぎるなよ？ ストレスとか肌に悪いって言うだろ。適度に休憩とか取って、もう少し肩の力抜けば？」

何も調べていないからそう言う事を言えるのであるが、黒子は少し納得したように頷く。

「そうですわね。もう少し肩の力を抜いてみますの。では鞍嶋さん、私は失礼しますわ」

「あいよー」

店を出て行く彼女をボーっとした目で見送りながら、優璃も運ばれてきた夕飯を平らげて店を出る。

夜道を一人で歩きながら優璃はいつ実家に帰ろうかと考えていると、遠くで落雷が落ちる轟！ という腹の底まで響くような轟音が聞こえた。

「うおっ、ビックリした…」

然して超ビックリした！ というリアクションを取らない優璃だが、もしかしたら今ので停電になったりブレーカーが落ちてるかもしれないと考えた優璃は、急いで自宅のマンションへと戻って行った。

結果としてブレーカーが落ちていたものの、ほんの十分程度だったので食品に影響は無く、事なきを得た。

今日が終われば、明日は夏休み。

高校生活初の夏休みを楽しみにしながら、優璃はベッドで眠る。

しかし優璃はまだ知らない、これから起こる出来事を。

夏休みが始まると同時に、優璃の日常は非日常へと変貌する。

フアクリティ―10 (後書き)

相変わらず締まらないオチ。
次こそは能力でるといいね！

フアクリティ―11（前書き）

今年受験です。結果長期休み以外はあんまり更新できないかもです。

まあそれはいいとして、最新話です。

フアクリティ―11

七月二十日、待ちに待った夏休みが始まった。

暑さが厳しいこの日を境に、学園都市の多くの生徒は面倒な手続きを経て実家へと帰る。

その為か、優璃達が住んでいるマンションの住民の殆どは帰省しているのもので、嫌に静かだった。

そんな静かなマンションの一室で、優璃は夏休みだと言っのにいつもどおりの時間帯に起き、朝食を作っていた。

時刻は八時ちよつと前。いつもなら部屋を出ている時間だが、夏休みくらい遅くたっていいだろう。

「ふんふふーん……あ、作りすぎたかも」

顔面包帯に青いエプロン着用というなんともミスマツチな格好で、優璃はボソツと呟いた。

簡単なミートソースパゲティを作っていたのだが、予想以上に麺が多かった為朝から食べるにはキツイ量となってしまうている。まあ朝からそんなハードな物を食べるのもあれだが。

「…上条と一緒に食うか」

どうせあいつのことだから冷蔵庫とか駄目になってるだろうし、とか考えた優璃は、大皿にスパゲティを盛り付けてその上にラップをし、当麻の部屋に持って行く。

昨日の落雷？ で電気系統が使えないと思った優璃だったが、そこは諦めないで根気強く直した。所謂気合とかいうやつである。

気合で機械とか直せるのとか思うかもしれないが、今は放って置く。

「上条さん、朝食のお届け物です」

インターフォンを押してそう言うと、扉が開かれる。

「おう、優璃。おはよう」

「もーにーん。朝食作りすぎたから一緒に食べないか？ つか断ったらお前の席にガムと蝸牛カタツムリ貼りつけるぞ」

脅迫紛いの言葉を放つ優璃。いつもの当麻であれば慌てて入れてくれるのであるが、今日は何か焦っていた。まるで子供が隠れて動物を持ってきているように。

「それは勘弁して欲しいんだが！？ …いや、でも…えっと、なんていうか」

そんな当麻のオドオドした言葉も虚しく。

「なんか良い匂いがするよ！ 食べ物かな？」

部屋の奥から、修道服を身に纏っている銀髪碧眼の少女、インデッ

クスがひよこつと顔を出した。

「この犯罪者め」

「だから違つて!」

「ありがとうゆーり。すつごく美味しかったよ?」

「お粗末さまでした。口の周りケチャップで汚くなってるからちゃんと拭けよ」

優璃はインデックスに濡れたおしほりを渡し、口を拭くように施す。

結局上がり込んで三人で朝食を済ませ、何故インデックスがこの部屋に居るのかを聞いた。

当麻曰く、布団のようにぶら下がっていたんだとか。

そして優璃が来るまで、おなかへったおなかへった五月蠅かったらしい。

そして当麻も何故二人とも知り合いなのかと聞くと、優璃は知り合った経緯を簡単に話した。

「にしても、よくあん時の俺を覚えてたな。今じゃ顔面包帯のミイラなのに」

「背丈と声質が一緒だったからね。それにそんなにデカかったら普通忘れないよ」

確かに、と納得する優璃。

「なあ優璃、お前この子と知り合いなんだろう？ 一体なんなんだ？」

「何って…女の子？」

「そういうこと聞いてるんじゃないの！ この子は何処出身でどうい子なのかを知りたいの！ つか女の子ってのは見れば分かるし」

「勘違いすんな。俺はこの子と知り合ったのはつい最近でほんの数分かそこらだぞ？ そこまで知るわけないだろ。つかこの部屋臭え」
今更そういうこと言うなよ…とか思いながらも、どうしたのもか頭を回転させる当麻。

優璃に聞いても詳しいことは分からなかった…ならば、やはり本人に直接聞いたほうがいいのだろうか。

基本学園都市に部外者は入れない。入れるのは学生とその血縁者、若しくは限定された企業関係（K3など）しか出入りは基本許されない。

部外者が入れればセキュリティが作動してもおかしくは無いのだが、もしかしたら昨日の落雷（故意）の影響で機械が故障したのかもしれないと考える当麻。

まあその前に優璃がインデックスと会っているのだが。

自力でそこまで頭の中で整理し、当麻はインデックスに質問する。

「まず、えーっと…インデックスだったか？ 何だってベランダに干してあったんだ？」

「干してあったわけじゃないんだよ？」

「は？ じゃあなんだよ」

「ホントは屋上から屋上に飛び移るつもりだったんだけど、その時に背中を撃たれちゃってね。バランスを崩してこの部屋のベランダに引っ掛かっちゃったみたい」

そうやって昔の自分の失敗を語るように言いながら笑うインデックス。その笑いは、当麻に向けられた微笑みであり。

しかし当麻も、そして当麻の向かいに座っている優璃もそれを笑える状況ではない。

「撃たれたって…誰に？」

優璃が緊張した声で聞くと、インデックスは躊躇う事無く、

「魔術結社だよ」

そう、言い放った。そして暫しの沈黙の後、当麻が口を開く。

「はあ、まじゆつ…まじゆつ？ …… つてなんだそりあ！ ありえねえ！！」

「へ、あ、えつと、あれ？ 言語を間違えたかな？ えーつと、こちで言つと魔術だよ、魔術。魔術結社」

呆然と、そして呆れたような目でインデックスを見る当麻。そして脱力するように。

「……ごめん、無理だ。魔術は無理だよ。俺もパイロキネシスとかクレアボヤンスとか色々な”異能の力”なら知ってるけど、魔術は無理だ」

魔術を否定した。頭ごなしに全てを否定するというわけでもないが、科学側に生まれ、科学側の人間として育ってきた当麻としては否定せざるおえない。

「なあ、優璃もそう思うだろ？ お前は最近こっちに来たから感性とかが違うかも知れねーけど、流石に魔術つてのは無理だよな？」

黙っていた優璃に同意を求めるように声を掛けた当麻だが、優璃から返ってきた答えは違った。

「正直、俺は魔術とかあると思う。魔術つてのがどんなモンかは知らねえけど、俺はあると思う。実際、上条の右手は科学じゃ証明出来ない力を持つてる。だとしたら魔術の類いかもしれないだろ？」

そう言われると、当麻は自分の右手を見る。

そして魔術があると信じる最大の理由は優璃自身にある。

まだそれは誰にも明かしてはいないが、その理由と比べれば、魔術があるかないかなんて些細な問題である。というか、魔術側から見ても優璃自身の問題は異常であるが、詳細については今は伏せておく。

「フーかき、ぶっちゃけ科学も魔術同じなわけだよ」

当麻とインデックスの視線を受けながら、優璃は言葉を続ける。

「科学の演算は魔術の工程だろ。それに俺からしてみりゃ行き過ぎた科学だって魔術と同じだ。まあ言わせて貰うとさ、科学が良いとか魔術が良いとかどうでもいいわけよ。俺の考えとしてはさ、科学も魔術も利便性を求めた結果だと思うわけよ。だから、どっちもどっちってこと」

長く話したせいで喉が渇き、優璃は手元にあったコップの水を飲む。

二人は何か考えているのか、空間は暗い雰囲気に含まれていた。

そんな空気を直すために、優璃は話を戻す。

「別に俺が正しいってわけでもねーし、あんまし気にすんな。ところで話は最初に戻るけど、結局その…マジックなんたらってのはなんなんだ？」

その質問に、インデックスはハツとした顔で答える。

「マジックキャバル魔術結社クローイツっていうのは、スメラ・マテューティナ魔術師が所属してる組織のことで、ローゼン薔薇十字とか黄金夜明とか、いろんな勢力が集まってるの。多分連中の

狙いは、私の持つてる一〇万三〇〇〇冊の魔道書だと思っ」

「……………はあ。で、何処に？」

何処に？ というのは、勿論保管場所だ。

そんな何万何千冊の本を保管しておくには、大図書館ほどの大きさが無いと厳しい。厚さ一ミリの紙切れにしたって、インデックスのような子供には持ち運べないだろう。

「何処につて…ここに。一冊残らず持つてきてるよ？」

部屋を見渡すが、魔道書なんて分厚くて禍々しい雰囲気を放っている古びた黴臭い本なんて置いていない。あるのは夏休みの宿題プリントや問題集ばかりだ。

「……………えーっと、それは魔術とかを使って特殊な方法で持つてきているってこと？ 例えば、超コンパクトに出来て尚且つ目には見えない…とか」

「私は魔力が無いから魔術は使えないの。それに、そんな魔術は無いよ？」

「……………かあ……………」

流石に、これは無理だ。

真剣に話しに付き合ってきた優璃だったが、もう限界である。

もしインデックスがそういう類いの魔術を使えると言えば続いただ

ろろが、魔力が無くて魔術が使えないとなると、流石の優璃でも目頭を押さえてしまう。

この話はインデックスが魔術を使えるという前提で話していたことなので、信憑性がガクツと下がった。

「あれ、なんでそこで二人ともグツタリするの？」

前を見ると、当麻も優璃と同じ心境だった。

「いや、魔力がないのに魔術魔術言われてもなー……なあ？」

「流石にな…信憑性は格段に下がった」

そんな二人の回答にムツと頬を膨らますインデックス。

「じゃあ二人は何か出来るの？　そこまで言うならちよーのーりよくってのを見せて欲しいかも！」

「見せろつつつても…優璃は結局開発してないし、俺は異能の力じやねえと反応しねえし…」

ふふーん、貴方達も同じじゃない！　と言ったインデックスは、何か思い出したかのように偉そうになる。

「言い忘れてたけど、この修道服は『歩く教会』っていつて、トリノ聖骸布ロンギヌスー神様殺しの槍に貫かれた聖人を包み込んだ布地を正確にコピーしたものだから、強度は法王ぜったい級なんだよ？」そこで一旦息を切って再び吸い込み、「だから背中を撃たれても平気だったんだよ。考えてみて？　防御結界を施してある教会に拳銃を何発撃ち

込んでも傷一つ付かないでしょ？」

要はそういうことらしい。

「てことは、それには魔術ってのが使われてるってことか？」

優璃がそう言うと、インデックスは力強く頷く。

「だったら…こっちも証明するか？」

当麻を見ると、彼は少し得意気に笑う。

「だな。インデックス、俺のこの右手は生まれたときからのなんだけど、それが異能の力であれば強力な旋風と稲妻を発生させた雷の暴風だろうが戦略級のレールガンだろうが、神の奇跡だって、この右手で触れりゃあ打ち消せるんだ。それは、お前のその『歩く教会』だって例外じゃない」

「君のその力が本つつつ当な・ら・ね！ うっふふーん」

「クソ、バカにしゃがって…上等だこんじゃろう！」

当麻はそう言って、インデックスの肩に右手を置く。

「おらあああああああああああああああああー……
って、あれ？」

しかし、何も起こらなかった。

「あれ、つかしーな」

優璃は腕を組みながら考えるが、そんな彼を尻目にインデックスは当麻に言う。

「あれあれ？ 異能の力なら何でも打ち消すんじゃないのお？
別に何も起きないんだけどお？ ん？」

矢鱈にムカつく口調でそう言い放ちながら、腰に手を当て歳にしては小さな胸を強調するように、どうだ見たかという感じで誇らしげにしているインデックスであった。

「（ま、あの服が魔術の類いで出来てんなら今頃すっぱんぼんだろ
うな。そういう意味では打ち破られなくて良かったと考えるべきか
？）」

がしかし、そんな優璃の模索も虚しく、何かか…そう、布がはち切れたような音がした。

インデックスの着ている修道服の糸という糸が綺麗に切れ、数枚のただの高級な布地に分かれる。

フサリと床に落ちるただの布地。無事なのは、頭に被っている帽子のようなフードのみ。

要は、首から下がすっぱんぼんである。

ファクリティ―11（後書き）

能力はあと2、3話でる…答

もしかしたら編集するかもです。

フアクリティー12 (前書き)

やだ全然更新できない。受験生って大変ね

ファクリティ―12

インデックスという白い修道服に身を包んだ少女には、怒ったら相手に容赦なく噛み付く悪い癖があるらしい。

現に、当麻の身体には幾つかの歯形が痛々しく残っていた。

「痛ったー、あちこち噛み付きやがって…お前は合宿ん時の蚊かなんかかつつーの」

「……………」

少女の返事はない。というか涙目になりながら（恥ずかしかったらしく顔もちよっと赤い）、布団で身体を隠しながら修道服を直している。大きめの安全ピンで。

まあ無駄な努力であるが。

「…………なあ優璃、これって俺が一〇〇%俺が悪いんでせうか？」

「でしようね」

優璃に聞いたたら即答された。

因みに優璃に噛み付かれたような跡はない。インデックスの服が少しずり落ちた瞬間から視線を明後日の方向に向け、自分は何も見ませんよとアピールしたのだ。

別に優璃は幼女体型に欲情はしないのだが、人の目というのがある。この場合だと当麻であろうか。

そこら辺の常識は整っている優璃。当麻のように事故であっても長つたらしく女性の裸体を見るような真似はしない。

「これはアンチスキルに連絡しとかないとな」

「やめて！んなことしたら俺の人生が下方方向に天元突破するから！」

俺は困らないからいいんだけど…、と渋々と言ったような感じで携帯を仕舞う優璃。

「そついやさあ、お前補習間に合うの？」

「え…？」

上条 当麻は夏休みの補習に引っ掛かった負け組である。

時刻は既に八時十五分。

「うわあああつ！補習忘れてた！！」

当麻は持ち物を確認しようと机に向かうと、急いでいたせいか机の角に足の中指をぶつけてしまう。

「でびゅっ…！！」

更にぶつけた足の指を手で押さえようと足を上げると、するり…とポケットから携帯が滑り落ち、結構勢い良く下ろした足で落ちた衝撃で開かれた携帯の液晶を踏み潰してしまふ。

「ああつ、携帯が!？」

「うわー痛そうー」

他人事ですねっ! と涙目で睨みながら未だに指先を押さえている当麻に対し、優璃は「だって他人事だし」の一言。

まあそれはそうと、と優璃は口を開く。

「その修道服が上条の右手に反応したってことは、互いに理解出来たと思う」

それから、という言葉の続きは優璃の携帯の通話着信音によって遮られる。

インデックスはそれに少しビックリして此方を見ているが、優璃は通話相手を確認してから二人に、ちよい失礼と言って電話に出る。

通話相手は最近仕事仲間となった白井 黒子からであった。

「はいはいもしもし」

『鞍嶋さん、おはようですの』

「うい。で、どしたの? 何かあったか」

『問題が発生しましたの』

「問題？ あ、気にすんなこっちの話だから。あーごめんごめん、続けてくれ」

問題という単語に反応した二人だったが、優璃は一度携帯を離して大丈夫だという。

『それが…グラビトン事件の主犯、介旅 初矢が意識不明になりまして…。原因は分からないのですが、取調べをしている最中にいきなり倒れたようです』

「どっか怪我したとかは？」

『いえ、彼の身体に異常はありませんの。でも、何故か意識だけがないんですの』

それと、と黒子は付け加える。

『今回のような症状で運ばれてきた学生は彼だけではなく、最近問題になった学生…それも、バンクの能力値と合致しない学生ばかりですの』

「…ほう。原因とかは…まだみたいだな」

『はい。ですが大脳生理学の専門家を招きまして、その方から色々聞いてますの。それで、出来れば貴方も来て欲しいのですが』

そう言われ、優璃は少し考える。

インデックスの今後の成り行きは気になるが、別にそこまで興味も無いし優璃が深く関わる道理もない。

それにこういうのは当麻がどうにかしてくれるだろう、そういう奴だし。

たつぷり七秒も使ってそう判断し、優璃は今から行くと言って場所を聞いて電源を切り、携帯をポケットに仕舞った。

「ってことで、俺はジャツジメントのお仕事に行きます。悪い上条、食器置いてくわ。また夜取りに来るから」

「おう。仕事でも無茶すんなよ?」

「わーってるよ。じゃあインデックス、俺はここでお別れだけど元気でなー」

いつの間にか安全ピンで繋ぎとめられた修道服を来ていたインデックスに、優璃は手を振りながら出て行く。

「うんっ、ばいばーい」

チラッと彼女の顔を見ると、その顔はとても悲しそうだった。

優璃は、彼女がもう自分達に会えないのが辛いのだろうかと思ったが、優璃はそう感じず、逆にまた近い内に会えるのではないかと思っっている。

そんな思いを抱きながら、優璃は黒子から教えてもらった『水穂機構病院』へと向かった。

水穂機構病院は至って普通の病院だった。

唯一なにが普通でないかと問われれば…

「…あつっ」

昨日のある意味” 故意的な落雷” のせいで、院内が蒸し風呂のように粘り気のある暑さになっているということであろうか。

落雷の影響で院内が停電を起こし、まだ復旧しきっていないようだ。

非常用の電気などもあるにはあるが、それは手術や重篤患者じゅうとくかんじやに当てている為冷房に回せないのだ。

優璃は院内に入った瞬間：いや、自動ドアが開いた瞬間のあの院内から吐き出されるように漏れ出てくる、むわっとしたような身体に密着するような生暖かい感触に眉を顰めた。

それでも入ったのだが暑い。誰が何と言おうと暑い。暑いものは暑い。あー暑い。

優璃の格好は、お馴染みK3の赤い色に黒いラインが入ったハーフシャツに足首が見える中途半端に長く薄い黒のズボン。

汗がダラダラと額と鼻から溢れ出る。これだから汗っかきは嫌だ。いやもう本当に。

「マジあつつい。まあいい、今は白井さんを探すか」

ハンカチ（勿論K3）で汗を拭き、優璃は偶々見かけた看護婦に声を掛けて黒子の特徴を伝え（ツインテ・ちっちゃい（色々と）・ですわ・お嬢様）、角を左に曲がって右です、といわれたのでそれに従って歩いていく。

左に曲がって右に行くと、その先には美琴と黒子、そして見慣れない女性の姿があった。

「（…？ ああ、もしかしてあれが白井さんが言ってた大脳なんたら先生か？ 随分と若いな）」

そう思いながら歩いていくと、美琴が優璃に気づき。

「…あ、鞍嶋さん」

「来ましたわね」

「おつす。夏休みなのに制服って珍しいな」

「いや、これはウチの学校の決まりなんで…。それで、鞍嶋さんはどうしたんですか？」

「白井さんに来てくれって言われてね。俺も一応はジャッジメントなんだし、協力できないかなーと。で、この人が白井さんの言った人？」

「はい、大脳生理学の専門家である木山きやま 春生はるみさんですの」

「初めまして、木山 春生だ」

「あ、鞍嶋 優璃と言います。本日はお忙しい中お越し頂き、ありがとうございます」

そう言つて、優璃は軽く頭を下げる。

春生は優璃の見た目とのギャップに驚いたのか、多少目を大きくしていた。

「ああ、随分と礼儀正しいんだな。そんなに畏まらなくてもいいよ」

「これはご丁寧…。にしても二人とも、その格好は暑くないか？俺はこれでも暑いつていうのに」

「仕方ないじゃないですか、学校の規則ですし」

「まあ暑いのは確かですわね…。何でも、昨日の落雷の影響で停電して、まだ復旧してないんだとか。というか鞍嶋さん、私は何度も白井と呼び捨てにして良いと」

「いやあ、呼び捨てにしたらエラそうになっちまうし、下の名前で言われるのは嫌だろ？ だったらさん付けで呼んだほうがいいだろ。まあ一週間かそこらかしたらさん付けはやめるよ」

黒子は微妙な顔をしていたが、優璃は気にする事無く視線を美琴に移す。

「それと御坂さん、無理して敬語使わなくていいよ？ 名前にさん

付けしてもらえば気にしないし。あ、でも”アンタ！”とかはナシな」

「注文しますね…。まあ分かりました。じゃあ鞍嶋さんって呼べば口調は気にしないのね？」

「おう。それで木山さん」

「……………ふう…」

「木山さん？」

「……………ん？ あ、すまない。暑くてポーっとしてしまって……………非常用電源は重篤患者や手術に使われているから仕方ないとはいえ、これは暑すぎる……………」

春生はそう言っつて、何故かネクタイを解き始めた。

「……………えっ……………？」

三人揃って不意を突かれたように声を上げる。

その間にも彼女は次々とワイシャツのボタンを外していき、遂には…

「……………んあゝ……………」

白衣とワイシャツを腕を通したまま下ろした。

ギリギリ？ ブラジャーだけは残っているが、右肩の紐が少しズレそうに…あ、ズレた。

「また始まった…」

「なななナニをいきなりストリップしてますの!?!」

「いいつ……!?!?」

美琴は顔を赤くしながら呆れたように、黒子は真っ赤になって怒鳴り、優璃は不意打ちで息を詰らせた。

「いや、…だって暑いだろう」

「と・の・が・た・の目がありますの! …殿方? ハッ、鞍嶋さん!」

「いやまっ、俺は何も見てな「ビスッ」んぎゃああああああっ! …!」

言い訳しようとした瞬間、優璃は空間移動してきた黒子の目潰しによって光を奪われた。

「下着を着けてても駄目なのか…」

駄目なものはダメである。

フアクリティ―12（後書き）

やだ受験勉強すんごく難しい。こりゃ長期に渡って更新しないのもありえるかな…。

あ、そういや健康診断で身長測ったら189.4だった！あと6ミリ欲しい！

うん、そんだけ。

P.S.

聖書科の先生が竹刀持ちながら授業してんの初めて見た。（私のクラスです）

ファクリティ―13

その後、美琴が専門家としての意見を聞きだそうとするが、院内では暑いと言う事で四人は外に出て近くのファミレスに移動した。

店内は冷房が効いていて程好く涼しく、快適な空間である。

ボックスの席に美琴と黒子が座り、その向かえに春生と優璃が座る。

「さてさて、先ほどの話の続きだが…同程度の露出でも、何故水着は良くて下着は駄目なのか…」

「…いや、そっちではなく…」

三人揃って否定した。

春生に任せたら話しが進まなそうなので、黒子と美琴がレベルアップ幻想御手について簡単に、しかし分かりやすく説明する。

「レベルアップ…それは、どういったシステムなんだ？ 形状は？ どうやって使う？」

「まだ、分かりませんの」

「兎に角君達は、それが昏睡している学生達に関係しているのではないかと…そう考えている訳だ」

春生はそう言っただ水滴がコップに付いている、冷たいアイスコーヒをストローで飲む。

「はい」

「で、そんな話を何故私に？」

「能力を向上させると言う事は、脳に干渉するシステムという可能性が高いと思われれますの」「黒子はですから、と繋げ「もしレベルアップが見つかつたら、専門家である先生に、是非調べて頂きたいんですの」

「寧ろ此方からお願ひしたいね」

春生は興味ありげにそう答え、「さっきから気になっていたんだが…」と言いながら窓を見る。

「あの子達は知り合いかね？」

するとそこには、窓にへばり付いて笑っている涙子とその少し後ろで笑っている飾利がいた。

「…何やってんのよ、あの子達」

「……………（無関係無関係…………）」

美琴は少し呆れながら、優璃は無関係を装って黙ってアイスコーヒを飲む。

まあ明らかにこっちにも手を振っているのもう無意味なのだが。

どうせならと言つ事で涙子と飾利も加えて話し合うことに。

席順は変わり、美琴と黒子の間に飾利。その向かえは優璃が抜けて涙子と春生。優璃は椅子を持ってきてもらい通路に食み出て座る。

「へえ、脳学者さんなんですかー。…ハッ！ 白井さんの脳に何か問題が!？」

「レベルアップの件で相談してましたの」

飾利の失言（自覚無し）で黒子は飾利をジト目で見る。

”レベルアップ”という単語を聞いた涙子は、プリンを食べていた手を止めて（頬にクリーム付き）ポケットから何か出そうとする。

「んあ、それなら」

「黒子が言うには、レベルアップの所有者を保護するんだって」

「どうしてですかー？」

「まだ調査中ですので、ハッキリしたことは言えませんが、使用者に副作用が出る恐れがありますの」

黒子がそう言うと、涙子はポケットから取り出した小さな音楽プレイヤーを持ったまま少し固まる。

「それに、容易に犯罪に走る傾向が見られまして…」

音楽プレイヤーを握っている涙子の右手が少しずつ下がっていく。それを見た飾利は、涙子に声を掛ける。

「あ、どうかしました？ 佐天さん」

「あつ…、いやあ、別に…」

慌てて音楽プレイヤーをポケットに仕舞う涙子だったが、慌てていたせいでテーブルに置いてあったアイスコーヒーに手が当たってしまった、達磨のように前後に二、三回揺れると、バランスを崩して春生の方に口を向けて倒れた。

当たり前だが中身が勢い良く吐き出され、彼女のストッキングをビチョビチョにしてしまう。

「（途轍もなく嫌な予感がする）」

優璃の心の眩き。それは見事に現実となった。

「あ…」

「ああつ、すいません！」

涙子が謝ると、春生はいきなりスカートを脱ぎだした。

「~~~~~っ?!?!?」

赤面する美琴と飾利。

「気にしなくて良い。掛かったのはストッキングだけだから、脱い

でしまえば……」

公衆の面前でストッキングを脱ぎ出す春生。

「だーかーらー！ 人前で脱いじゃ駄目だと言ってますでしょうが
！！ ねっ!？」

怒りと恥ずかしさで顔を赤くしながら怒る黒子。

「……………」

顔を近くにあつたメニュー表で隠し、私は見ていませんと主張しながら目を護る優璃。

「しかし…起伏に乏しい私の身体を見て、劣情を催す男性がいるとは……」

「趣味趣向は人それぞれですの！ それに殿方でなくても、歪んだ情欲を抱く同性もいますのよ!？ ねえっ!」

それは自分のことを言っているということに気付いているのだろうか。まあまともな意見っちゃあまともだが。

「そうですね！ 女の人が公の場でパンツが見えるようなことをしちゃダメですっ!」

涙子も言う。しかしそれをやられてる被害者（飾利）からすれば、お前は人にそれをやってんだよ、という感じである。

「（何で自分達もやってるって気付かないのよ…）」

美琴は内心呆れながら、飾利と二人で俯いていた。

そんなこんなで既に夕方。

「お忙しい中色々教えて頂き、ありがとうございました」

「いや、こちらこそ教鞭を振るっていた頃を思い出して、楽しかったな」

ファミレスを出て、春生とは入り口で別れることに。

「教鞭…ということは、学校の教師をやっていたんですか？」

優璃がそう質問すると、春生は「昔…ね」と、何処か寂しげに言った。

それは優璃だけにしか分からなかったらしく、他の四人は微笑みながら彼女を見送った。

「なんつーか、ちょっと変わった感じの人よね」

「常人とは違う感性が、天才を生むんですわ」

「まあ馬鹿と天才は紙一重って言うしな」

「そう言えば佐天さん、見せたい物って」

「あ、えーっと」

「（そういえば今日のチラシに鶏肉が安いつて書いてあったけか）
春生がいなくなると、優璃達はいつもどおりに会話する。」

「ゴメン！ あたし用事あったんだ。また今度見せたげるね。じやねー！」

「はあ…」

「じゃーなー」

優璃は涙子に手を振って別れを告げる。

「どうしましたの？」

「さあ…？」

「ま、俺達も帰ろうぜ？ …あれ、御坂さんがいねえ」

辺りを見渡しても美琴の姿は無く。

「あら、お姉さままで…おねーさまー？」

「何か用事を思い出したんですかね？」

「さあ？ あ、俺これからスーパーに行かなくちゃならないから道
違いわ。じゃなー」

そして優璃も、二人に別れを告げてスーパーへと向かう。

「むう、買い過ぎたか」

スーパーの帰り道、優璃の手には鶏肉しか入っていない袋がぶら下げられていた。

「まさか一〇〇グラム二〇円とは…なんとお財布に優しいことか」

因みに優璃は安いのを良いことに、鶏もも肉を二キロも購入した。正直バカである。

そんなランラン気分でマンションに到着。

ファミレスから出たときは夕焼けが綺麗だったのだが、今は夏といえど少し薄暗かった。

マンションに入ろうとすると、向かいの道から当麻が歩いてきた。どうやら補習が終わったのが完全下校時刻だったらしい。

「お疲れさん、上条」

「おう…本当にお疲れだよ」

話を聞くと、小萌を泣かせてクラスの男子から睨まれたり、スケスケ見る見るやらされたり、コロンブスの卵やらされたり、さっきビリビリ中学生に喧嘩売られたり、ビリビリの挑発で放った電撃が清掃口ボを故障させて逃げ回ったりしていたらしい。

「実に充実した日ではないか」

「お前実際に体験したら一日持たないぞ？」

それにしてもいきなり美琴がいなくなったのはコイツのせいだったのか、とか思う優璃。

エレベータに乗りながらそんな会話をし、自室のある階で降りる。

そして通路に出ると、清掃ロボが当麻の部屋の前に数機集まっていた。

「清掃ロボット？ たたく、人の部屋の前で何掃除してやがんだ？」

「ナニじゃないの？」

「うっせ」

しかし良く見ると、清掃ロボが掃除しようとしていたのは、今朝に会った少女……インデックスであった。

「え、お前あの子追い出したのか」

「なわけあるかっ。俺はいてもいいんだぞって言ったんだけど、あいつここが危険になるかもしれないからーっつって出て行ったんだ」

「ふーん。にしても、また行き倒れか？」

興味なさ気に返しながらも、優璃はまたインデックスと会えたこと

に、心のどこかで安堵する。

何だかんだ思っても、優璃も心配だったようだ。

「はあ。なんて言うか、不幸だ」

そう言いながらも、当麻の顔は微笑んでいた。こんな面白い再会なんて、滅多にないことだ…と。

二人が近付くと、清掃ロボは動きを一旦止める。

「……ん？」

インデックスとの距離が近付くと、優璃は鼻で捕らえた匂いに眉を顰める。

「（こりゃ鉄……いや、なんか血生臭いぞ？）」

そんな優璃に気付かず、当麻はインデックスに声を掛ける。

「おいインデックス、こんなとこで何やってんだよ。こんな所で寝て…え…？」

グジュ、と小さな音がした。

優璃もインデックスを良く見て、漸く気付いた。

インデックスが血だまりの中に沈んでいることに。

「お、おいおい。こりゃどういっつった」

「……、え、…あ…？」

驚きに顔を強張らせる優璃と、驚きよりも戸惑いが頭の中を乱す当麻。

清掃口ボで見えなかった部分には、腰一線に斬られた痕が生々しく残っていた。

銀髪の美しい髪は腰で切り揃えられ、毛先は赤く染まっている。

「（待て待て待て待て、いきなり過ぎんぞ！ 殺人？ いや、まだ息はあるか。こちら辺に近い病院は…ってダメだ！ このガキはこの住人じゃねえ。いや、それよりも先ず止血だ、話はそれからだ）」

血は喧嘩などで見慣れているとはいえ、流石にこの光景に眉を顰める優璃。

冷静に結論を出すと、優璃はインデックスに近くでしゃがむ。

「どうしたんだよ、インデックス！ 一体誰がこんなこと…！」

「ヤバイな、唇が青くなってる。上条、コイツの身体あんま揺らすんじゃないぞ。俺は部屋から包帯とか持ってくるから」

「あ、ああ…！」

優璃がそう言って立ち上がると、丁度優璃の部屋の辺りに長身の男がいた。

「誰が…ね。僕達”魔術師”だけど？」

その声に、当麻も振り返る。

白人の二メートル近い身長、男の顔は当麻と優璃に比べて幼く見え、歳もインデックスと変わらなそうだった。身長が高いのは外国人特有のものであろう。

服装は教会の神父が着るような漆黒の修道服。十五メートルも離れているのに強く香ってくる香水の匂い。真っ赤な髪に毒々しく光る左右の耳に五つずつ付けているピアス。左右十本の指にも銀の指輪がメリケンサックのようにギラギラと輝いており、口には煙草を啜え、極めつけは右目の下にあるバーコードの形をした刺青^{タトゥー}。

既にこの空間は異常と化していた。この男は普通ではない。そんなの、見ただけで感じ取れる。

当麻は知らないが、優璃は既に逃げるルートと方法を考えていた。

目の前にいるのは魔術師。持ち前の順応力で出来るだけ現状を把握し、三人でこの場を離れる算段を立てる。

優璃がもし能力者であれば対抗するという選択肢もあっただろうが、生憎無能力者である。

当麻だって同じだ。右手以外は普通の学生、対抗できるのは”異能力”のみ。……いや、まて。

「……魔術師…だって？」

「うん？ 君、魔術を知ってるのかい？」

男は少し驚いたように優璃に聞く。

「いんや、詳しくは知らないね。やり方とかには興味なかったし。

……それより聞いてえんだけどよ、斬ったのはテメエか？」

勝機を見つけた優璃は、睨むわけでもなく男を見る。

「うん？ うんうんうん？ 嫌だな、そんな目で見られても困るんだけどね」

男が見ているのは優璃ではなく、無言で立って男を睨みつけていた当麻だった。

「ソレを斬ったのは神裂だし、彼女だって何も血塗れにする気なんてなかったんじゃないのかな？ 『歩く教会』は絶対防御として知られるからね。本来ならアレぐらいじゃ傷もつかない筈なんだけどもね。……全く、^{セント}聖ジョージのドラゴンでも再来しない限り、法王級の結界が破られるなんてありえないんだけどね」

言葉の終わりは独り言のように、それでいて笑みが消えていた。

それに対し優璃は、気付かれないように口端を吊り上げる。

「ふざけんな！ 何が血塗れにさせる気はなかっただ！ こんな小さな女の子を寄って集って追いついて、血塗れにして……こんな弱ってるこの子を前に！ テメエはまだ自分の正義を語んのか……！」

「ハア、だから僕がやったんじゃないんだけどね」

「テメエ！ と叫んで駆け出そうとした当麻を片手で制止し、耳元で
呟く。」

「焦るな上条。いいか？ 相手が何かも分からないで突っ込むのは
危険だ。もし拳銃とか出されたら無能力者の俺達に出来ることはな
くなる」

「だったらどうしろって！」

「落ち着け、まずは相手の出方を見る。もし相手が近代的な武器を
出した時は…考えるが、”異能の力”と判断出来るものであれば、
俺達にも勝機はある」

そう、本当に相手が”魔術師”というオカルト存在だとして、魔術
を使って火の玉とか飛ばしてこれば、当麻の右手で打ち消せる。

「何を話しているのかは知らないけど、僕を倒そうなんて考えない
ことだね。君達には無理だ」

「ハッ、だろうねえ…。なあ、そういえばこのガキが言ってたんだ
けどよ、一〇万三〇〇〇冊の魔導書って…どこにあるんだ？」

当麻は優璃に任せているのか、チラチラと様子を見ながらもいつで
も動ける体勢を崩さない。

男は一度煙草を吸い、息を吐いてから答える。

「あるんだよ、ソレの頭の中に」

「頭の…中？」

当然のように答える男に、当麻は呟く。

「完全記憶能力って、知ってるかい？ 何でも、『一度見たものを全で一瞬で覚えて、一字一句を永遠に記憶し続ける能力』だそうだよ。簡単に言えば人間スキャナだね。まあ、これは単なる体質らしいけど」

「完全記憶能力…ね。そりゃ羨ましいな」

「羨ましい、か。彼女^{バクタープロ}の頭は大英博物館、ルーブル美術館、バチカン図書館、華子城遺跡、コンピエーニュ古城、モンサンミッシェル修道院…これら世界各地に封印され持ち出すことのできない『魔道書』を、その目で盗み出し保管している『魔道図書館』って訳なのさ」

そんな事を言われても、普通は信じられない。だが、最早普通などとは言ってられない。

「……………はは、…大体は把握出来た」

優璃は男の話しを聞いている間にも考えていた。インデックスをどうするかを。

その中には引き渡すという選択肢もあった。だけど、優璃の結果は変わらなかった。

引き渡せば、巻き込まれなくて済む。本当はそれがいいんだろうけ

ど、優璃も当麻も、そんな人間じゃなかった。

目の前で死に掛けてる少女をこんな怪しい奴に、引き渡して堪るか
！！

「このガキは、俺達が預かつといてやるよ」

「…何？」

「テメエの言ってることは本当かも知れねえ。だけど、こんな小せえガキを殺し掛けた奴なんかに…絶対に渡さねえ。上条も、それでいいだろ？」

「ああ、勿論だ！」

二人は男を睨みつけ、戦闘態勢に入る。

「…ハア、やれやれ。こつちは隠密にやりたかつたんだけどね…仕方がないか。ステイル」マグヌスと名乗りたいところだけど、ここはFortis931と言っておこうかな」

口の中で何か呟いたあと、ステイルは二人に向かって自慢げに言う。

「魔法名だよ、聞き慣れないかな？ 僕達魔術師って生き物は、何でも魔術を使うときには真名を名乗ってはいけないそうだ。古い因習だから、僕には理解出来ないんだけどね」

当麻は右拳を強く握り締め、駆け出す。

優璃は当麻の後ろに付いていくようにして、上体を低くする。

「まあ今は魔法名というよりも……」

既に距離は半分。当麻は更に強く握る。

「……殺し名、かな？」

”魔術師 ステイル”マグヌス”は啜っていた煙草を手に取り、指で弾いて横合いへと投げ捨てた。

オレンジ色の軌跡^{ライン}が残像のように煙草の後を追う。

「炎よ……」

ステイルが呟いた瞬間、オレンジの軌跡^{ライン}が轟！と爆発した。

フアクリティ―13（後書き）

やべえよ勉強やべえよ。

こんなことしてる場合ちゃうよ本当に…。

多分次回に主人公の能力がでます。まあタイトル見たら分かるよね？

感想・意見・その他諸々待ってます

フアクリティ―14 (前書き)

最早テストが近いと言う…。

最新話です。遅くなりました。

ファクリティ―14

それはいきなりだった。

当麻が先行し、その一メートル程後ろに優璃が駆け出した。

しかしステイルが何かを呟いた瞬間、その手にはオレンジ色の炎剣が現れる。

その光景に二人は思わず足を止めた。

まだ一〇メートルは離れているのに、二人はその炎剣を見ただけで肌がチリチリと痛み出す。

「一応聞くが…」

「うん？」

「それは、” 魔術 ” か？」

炎剣を見つめながら優璃がそう言うと、ステイルは興味無さげに呟くように答えた。

「ああ、これが魔術。君達には到底理解できない代物だよ」

それを聞いて、優璃は勝機を見出す。しかし打って変わって、その勝機の源となる当麻は不安だった。

もしステイルの炎剣が魔術によって出来た代物だとしても、”魔術なんて得体の知れない代物に、俺の右手は通用するのか？”…そんな考えが、当麻の頭を過ぎる。

「……巨人に苦痛の贈り物を」

ステイルは無表情で炎剣を横合いに振り、二人に叩きつける。

炎剣は形を失い、炎の奔流が全てを溶かそうと襲い掛かってくる。

爆発。熱波。爆音。閃光。黒煙が学生寮から立ち込める。

「少しやりすぎた…かな？」

ステイルは頭を掻きながら呟いた。あそこで二人のうちどちらか一人がインデックスを盾にしようとしていたらどうしようかとも考えたが、それは杞憂に終わった。

炎の先を見る。二人の死を確認する必要はない。今のは摂氏三〇〇度の炎だ、人間の身体は一〇〇〇度からは”焼ける”ではなく”溶ける”らしいから、そもそも確認のしようが無い。まあ残っていたとしても、壁にへばり付いたガムのようなカタチになっているとこだろう。

「ご苦労様、お疲れ様、残念だったね。ま、そんな程度じゃ一〇〇〇回やっても勝てないってことだよ」

「誰が、何回やっても勝てねえって？」

炎の地獄から聞こえた声に、ステイルの動きが凍結したように固まる。

轟！ と辺り一面の火炎と黒煙が渦を巻いて吹き飛ばされた。

上条 当麻と鞍嶋 優璃が、そこにいた。

鉛細工のように金属の手摺は^{ひしゃ}拉げ、床や壁の塗装は捲れ上がり、蛍光灯は光熱で溶けて滴り落ち……そんな炎の地獄の中、傷一つ無く二人の少年は佇んでいた。

「まったく、焦らせやがって」

ステイルが信じられないような目で見る中、優璃は当麻を咎めるように言う。

「はは、ごめんごめん。ま、考えてみりゃそうだよな。”インデックスの『歩く教会』を壊したのだから、この右手なんだし”。所詮

……」

当麻はステイルを睨みつけ、言い放つ。

「……”異能の力”だ」

そう、当麻にとっては所詮その程度のものなのだ。

当麻は魔術について一から十まで丁寧に話されても半分も分からないだろう。だがしかし、所詮”唯の”『異能の力』なのだ。

そんなこと、馬鹿の当麻でも分かる。

「邪魔だ」

撰氏三〇〇〇度の炎が二人を取り囲んでいるが、当麻が一言言つて右手が触れると全ての炎が全て消え去つた。

「残念だつたな、似非神父。コイツに『異能力』は効かないぜ？」

ニヤリと口を吊り上げる優璃と、自信に満ちた表情の当麻。

ステイルは困惑する。あいつ等は普通ではない。何かが違う。魔力もなければ”同じ世界の匂い”もしない。…ならば、こいつ等は…？

「……っ、世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

早口で呪文を唱えだすステイル。しかし二人はそれを待たない。待つていられない。待つ義理もない。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ………」

だが、ステイルの詠唱が早かつた。

「……インケンティウス魔女狩りの王！！」

ステイルが着ている修道服の胸元が大きく膨らんだ瞬間、内側から
の力でボタンが弾け飛んだ。

内側から飛び出したのは炎。それは酸素を貪る様に吸収する。

これは唯の炎の塊ではない。オレンジと朱色の炎に包まれている黒
い塊。重油のようなドロドロしたものが芯となっていた。

そして”ソレ”は人のカタチを模る^{かたじ}。

その名は『魔女狩りの王』。意味は『必ず殺す』。これぞ正しく”
必殺”

必殺の意を背負う炎の巨神は、当麻に向かって弾丸のように突き進
む。が

「ホラよ、っと」

ボン！ と、裏拳を放つように、それでいて面倒臭そうに・・・吹
き飛ばす。

しかし、魔術師ステイル「マグヌスは笑っていた。

その表情を見逃さなかった・・・いや、見逃せなかった当麻は足を止め
る。

「おい上条、どうし・・・た・・・あ？」

ビュルン！ と、粘性の液体が飛び跳ねる音が”後方”から聞こえ
た。

当麻は気付く。何故自分の相手がステイルなのだろうと。

当麻に『異能の力』は効かない（右手首から手先までだが）。ならば逆に、優璃はどうだろうか。最近学園都市にやってきたばかりの無能力者ではないか。

火炎放射器と対象物の間に薄いティッシュを入れても、それは一瞬で燃える。ステイルにとって、優璃とはその程度なのだ。

ステイルの攻撃が通らなくても、後ろからの攻撃で二人ともお陀仏という算段。

突き出した右手は引っ込めない。そうすれば、当麻が死んでしまうのだから。

イノケンティウス
魔女狩りの王の炎の十字架が、優璃に向かって振り下ろされる。

「うッ!！」

優璃は両腕で頭を庇うようにして目を瞑る。

そして十字架が優璃に触れた瞬間……バグンッ!!
という音が聞こえた。

その音と光景に当麻は勿論、ステイルもあと一步の所まで来て足を止める。

「くっ、ううう……、あ……れ？」

鞍嶋 優璃は生きていた。それも、無傷と言う形で。

困惑しながらも、優璃は目の前にいる存在を見る。

イノケンティウス
魔女狩りの王は健在。背丈の大きさも変わらない。だが……。

「十字架が……な、い？」

先程まで形取っていた炎の十字架が消えていた。否、手から無理矢理？ぎ取られたように見える。

「チツ、イノケンティウスッ！！」

ステイルの叫びで、イノケンティウス魔女狩りの王は再び剣のような十字架を作り出し、次は真正面から突き刺すように、体重を前にかけて（体重というのがあるかは分からないが）十字架を立てる。

しかし、その常人だったら溶けてなくなるような突きは、十字架の先端から”喰われていった”。

「なっ、あ……なん、だよっ……こ、れ！！？」

バグンツ！ グチャ！ バリィ！ ゴリュ、ゴリュ……ゴ
クンツ。

突きに全体重を掛けたイノケンティウス魔女狩りの王は、踏み止まる事も出来ずに跡形も無く喰われていった。

「バ……かな……っ、貴様あ……！！」

「っ、うおおおおおっ！！！」

切り札を”喰われた”ステイルの瞳に、最早余裕の色は無い。あるのは、たかが”普通の”高校生二人に対する恐怖のみ。

炎剣をハサミのようにして当麻に斬りかかるステイル。だが当麻は突き出した右手を引っ込めて拳を強く握り締め、刃と刃が交わっている支点目掛けて突き出す。

右手に触れた炎剣は花卉のように舞って消え、その力強い拳はステイルの顔面を捉える。

顔面直撃パンチを食らったステイルの身体は竹蜻蛉たけとんぼのように回転しながら宙を浮き、後頭部から金属の手摺に激突し、気絶した。

ファクリティ―14（後書き）

遂に生まれた主人公の能力！

名前は出てないけどね！

まあ普通に能力喰い（ファクリティ―イーター）でいいかなとも思ってる。

ころそこ！ センスねえとか言っな！！

感想・意見・誤字脱字・その他諸々待ってます。

次回の更新は下手したら一カ月後くらいになっちゃいます。

感想とかくれればもっと早く更新出来るかもね！

フアクリティ―15 (前書き)

やっと更新できた！ 専用のPC届いたからデータが消えることもないね！ やったよ吹寄さん！

でも更新は不定期だよ

消防の消火活動とアンチスキルによる現場検証が進む中、俺は現場に偶然居合わせたジャツジメントとしてアンチスキルに状況を報告した。

勿論、殆どの話はでっち上げだ。

”魔法使い”や”魔術師”と言ったところで、学園都市（ここに）に住んでいる人間が易々と信じるとは思えない。

俺は実際に見たから信じれるが、見ていなかったら俺だって信じる可能性は低い。

そしてその魔術師はと言うと、インデックスを抱いた上条と俺がこの場所から離れていた頃にはすでにいなくなっていた。

俺は離れる際にスプリングラーのボタンを押したので、先程まで無人同然だった学生寮は人だかりが出来ていた。

因みに上条はというと、今は恐らく月詠先生の家へと向かっているだろう。

出血の酷かったインデックスは早急に手を打たないと命に関わる程だったのだが、部外者であるインデックスはIDを持っていないので病院には行けない。

だからといってあのままにしておくことも出来なかったのだが、インデックスは一〇万三〇〇〇冊もの魔導書を”脳内”に全て記憶しているのだ。

そして治癒に関する書物はあるにはあったのだが、インデックス曰く俺達…つまり学園都市で開発を受けた人間は使えないらしい。回路が違うんだとか。

俺はセーフではないかと思っただが、先程俺自身の身に起こったことがまだ分かっていないため術式を受けるわけにはいかなかった。

そこで俺は考えた。『才能のない』人間であれば中学生でも出来ると言われる治癒魔術。しかしここは学園都市、開発を受けていない生徒なんて一人もいないだろう。

そう、”生徒”なら。

この学園都市にもいるのだ、『才能のない』人間達が。

それは教師や学者など、外から来た開発を受けていない人間。

巻き込むのは気が引けたが、目の前で苦しんでいる少女を助けるためだ、あの人なら戸惑いながらもしっかりやってくれそうだ。

月詠先生…俺と上条の担任であり、生徒からも人気がある（主に可愛いという理由で）。見た目小学校低学年という学園都市の七不思議の一つとされている。

俺は上条に連絡をしろと伝えると、ジャッジメントとして学生寮に向かった。

実際俺が行ってもあまり意味はなかったと思うし。

アンチスキルとの話し合いを終えた俺は、報告書を書くべく支部へと足を運んだ。

フアクリティ―15（後書き）

み、短い…

話が詰まるなー。やっぱり行き当たりばったりでやったら駄目だね

眠気も相俟って考えられないよ

次回の更新はいつかな。もうないのかな？

また大会近いので不定期ですー

目が覚めたら、既に朝だった。

「…………… やっちまった」

支部に行くこととして、その途中にベンチあったから一休みしたらこれだよ。

しかし、よく補導とかされなかったな俺。まさか爆睡しすぎて起こすの面倒だったのか？

そんなことを考えながら、俺は身体をある程度解してから支部へと向かう。

そんな途中、白井さんから電話が。

「あいさ。どした？」

『おはようございますの。鞍嶋さん、先日のレベルアップについての最新情報入手いたしましたわ』

「お、マジか。して、どんな情報だ？」

『はい。先ずレベルアップの正体は”音楽”でしたの』

ほほう、音楽ね。

「ってことはあれか、そのレベルアッパーの曲か音かを聞けば、誰でも能力値のレベルが上がるってわけか？」

『まだ確実にとは言えませんの。何しろ眉唾物ですし…しかし、今はこれが唯一の手掛かりですので』

確かに、レベルアッパーの現物が手に入ったのは喜ぶべきか。これで事態が大きく進展してくれるといいんだけど。

「あ、そうだ。俺今からそっちに用あるからさ、序にレベルアッパーを見せてくれない？」

『今からですか？ それは構いませんが、用とは？』

「ちょっと俺んとこの寮が小火騒ぎ起こして入れねえんだわ。で、ちょうどジャツジメントの俺がいたからアンチスキルに色々と報告して報告書書きに行くってわけ」

『え？ 怪我はないんですの？』

「あー、ないない。何とか掻い潜って脱出してきたからさ。それより、あと少しで着くからよろしくー」

『はあ。分かりましたの』

白井さんは俺の軽い対応に少し呆気を取られたようだが、そっちのほうで都合はいい。

さて、今頃上条たちは何をしているか…。

電話を掛けようにもあいつ携帯壊したし、月詠先生ん家の電話番号知らないし……………あ。

俺は携帯を仕舞わないで、目的の人物に電話する。

多分、奴なら知ってる筈。

ワンコール…

ツーコール…

スリー…

『もっしもし、どうしたユウちゃん？ あ、まさかピンク色の髪の毛のキャラは全員淫乱かどうかについて語りに』

「また今度な」

電話に出たのは野太い声が特徴の青髪ピアス。本名は知らん。

まあ、こいつなら知ってるだろう。

『最後まで言わせてーな。で、どったの？』

「お前月詠先生の自宅番号知ってるだろ？」

『知つとるけど？ ……あ、まさかユウちゃん小萌せんせーに告白するんか！？ 待った、それは色々と犯罪やで！』

「黙れ害虫。いいからつささと教える、こっちはジャッジメントの仕事で忙しいんだよ」

何故か疑いをやめない青髪から番号を聞き出し、電話する。

暫くすると、ガチャッと誰かが電話に出た。

『えっと、はい、月詠ですけど…』

「よー上条。そっちの調子はどうだ？」

電話に出たのは上条。恐らく月詠先生はどこかに出かけてるのだろう。

『優璃か！ お前身体は大丈夫なのか？』

「あ？ 何が」

『いやいや何がじゃなくて！ お前昨日あの変な似非神父の炎の魔術食らってなんか変な事になってたじゃんか』

「まあ、今のところ異常はない。それは事が片付いたらよく考えるさ。で、インデックスの調子はどうだ？」

昨日の状態を見るに、あれは結構重症だったと思うが…。

『インデックスか？ ああ、今はベッドに寝かせてあるけど傷口とかは治ってるぞ』

「すげーな。それも魔術つてやつか？」

『多分な』

ふむ、魔術は本当に存在していたか。まあ、別に不思議なことじゃねえか。

「ん、それ聞いて安心したわ。じゃあ俺はジャッジメントの仕事に戻る。あんまし無理すんなよー？」

『分かってるよ。お前も無茶はしないようにな』

互いに電話を切り、俺は既に目と鼻の先にある支部へと足を伸ばした。

フアクリティ―16（後書き）

みなさんこんばんわ

ふむ、ちよびちよびしかできてないな。まあしょうがない

あ、20〜24日は大会なんで気まぐれ更新できないかもです

とどうより毎回気まぐれですけどねww

感想その他もろもろ待ってます

ファクリティ―17 (前書き)

大学二回落ちたよこんちくしょう・・・

支部に向かっていた俺だが、生憎いつも使ってる道は工事されてい
て使えなかったため、今回は路地裏を通っていく事にした。

朝だと言つのに薄暗く陰鬱な雰囲気を漂わせる道だが、仕方がない。
出来るだけ本通りからは離れないように進もうとするが、構造上の
問題自然と本通りからは離れていく。

道に迷わなければいいんだけどな…。てか喉渴いた。

そうは思っても水なんてどこにも落ちてはいない。まあ当たり前か。
支部でなんか飲み物でも貰おうかと思いつきながら歩いていると、先の
曲がり角から足音が聞こえてきた。

いや、路地裏つつつても道は道だし、誰かしらいてもおかしくはな
いんだけどさ。

「不良じゃありませんように不良じゃありませんように…」

この体格のおかげで不良に絡まれることなんて数知れず。こつちと
しては相手が面倒だからスルーしてくれるとありがたいんだがなあ。

足音からして一人だと思つが、まあ絡んでこなければそれでいい。
あと顔面に対するツッコミもいらぬ。

そんなわけの分からないことを考えてる内に、俺は曲がり角を曲がっていた。

反射的に目でその先を見ると、そこには一人の少女がいた。

髪は茶髪で半袖のブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートを身に纏った、御坂さんだった。

「……………」

「……………」

でも、なんか雰囲気が違う。てか、頭のそのゴーグルみたいなやつ何？

「…御坂、さん？」

「はい、私はミサカと申しますが。と、ミサカは初対面の顔面ミイラ男に礼儀として答えておきます」

…うん、やっぱりおかしいよこの子。てかミイラ男言うなし。

「あれ、初対面？ ……あ、もしかして御坂さんの姉とか妹とかだったりするの？」

そしてミイラ男発言を見事にスルーする俺であった。

「その発言からすると、貴方はオリジナルと間違えていますね。と、ミサカは貴方の誤解を解きます」

「ああ、ごめんごめん。あまりに似ていたもんだからついな。にしても、御坂さんに姉妹がいたなんてな……あ、俺は鞍嶋 優璃。御坂さんの知り合いで、一応ジャツジメントしてる」

「そうですか。と、ミサカは別に知らなくてもいい情報を聞き流し答えます」

「……………」

うん。妹さんは結構毒舌だね。涙が出ちゃう。

「そ、それより妹さんは何してたんだ？ 女の子がこんな路地裏で一人は昼間でも危ないぞ？」

「いえ、別に」

そんな妹さんからの後ろから、可愛らしい泣き声が聞こえた。

「猫か？」

後ろの足元を見てみるとダンボールがあり、その中には一匹の白黒の子猫がいた。

ヤバイ、めっちゃ可愛い。

「はい。この子猫は捨てられていて「何この子可愛い！ あんらまーちっちゃい！」……………」

俺は小さいモノに弱い。子猫を両手で優しく抱える。

「何々、お前捨てられちゃったのか？ 可哀想にねえ。お前を捨てる奴なんて滅べばいいのにな」

「何ですかその顔とのギャップは。正直気持ち悪いです。と、ミサカは怪訝な顔をしながらリアルに引きます」

「おうおう引け引け。だが俺のちっちゃいもの好きは治らんぞ？」

顔を綻ばせながら俺は子猫を愛撫する。触ってるだけで幸福ですはい。

「まあいいです。では、その子猫は貴方に預けます。と、ミサカは内心ホツとしながら子猫を預けます」

「あれ、妹さんがこの子引き取らないの？」

「私のいる施設はペット禁止ですので。と、ミサカは飼いたい衝動を抑えつつ言います」

「俺の寮も確かペット禁止だったような…？ ま、いつか。分かった、こいつは責任を持って引き取らせてもらおうよ」

「ありがとうございます。では私はこれで。と言って、ミサカは礼をした後踵を返します」

「あ、ちょっと待った。こいつの名前、妹さんが付けてくれよ。見つけたのは妹さんだし」

「では……ポチで」

「せめて猫っぽい名前にしないか？」

「…ひろし」

「いや、そしたらこいつ猫ひろしっていう芸人と被るから。しかもこいつ雌だし」

「で六」

「だから雌！　そしてそれは株式会社の名前だから！」

こいつの感性が分からん。

結局名前は「クレオパトラ」となった。どうしてこうなった…。

無事支部に到着した俺は白黒の子猫、もといクレオパトラを抱きかかえ入室した。

「こんちわーっす」

「あ、こんにちは鞍嶋さん」

「少し遅かったですわね。何か御用でもあったのですか？」

「いやー、ちょっとね」

妹さんのことは言わない事にしよう。御坂さんが言っていないってことは、あんまし知られたくないことかもしれないし。

それにあの目。怖いくらい感情分かんなかったし。

「初春さんと白井さんだけか。来て早々悪いんだけどさ、クッキーとかない？」

「あ、私持ってますよ。食べます？」

「いや、こいつにちょっと」

抱えていた腕の中から頭をにゅっと出してくるクレオパトラ。超可愛い。

「子猫じゃないですか！ 可愛いですね」

「触る？」

「是非っ！」

「コラ初春、まだ仕事の途中ですわよ！ それに鞍嶋さんも、ここはペット禁止ですよ！」

初春さんにクレオパトラを渡し、クッキーを与える。

「仕事終わるまでここに預けてもいいだろ？ ちゃんと持って帰るからさ」

「し、しかし」

「白井さん白井さん！ この子猫すっごく可愛いですよー！」

「ミャー」ウルウル

「うっ…確かに可愛い…ですけど」

「ミャー」キラキラ

「うう…わ、わかりましたの！ 今日だけですのよー！」

流石小動物。効果は抜群だ。

「で、何やってたんだ？」

「そうでしたの。初春、そろそろ続きをしないとその頭の花を一輪ずつ貴女の皮膚にレポートさせますわよ」

「は、はいい！」

ちよーこえー…。

「で、では。レベルアップの件ですが、正体は音楽でした。業者へ連絡して取り扱っているサイトを閉鎖するまでのダウンロード数は五〇〇〇を超えています」

「五〇〇〇って…相当な量じゃん」

「全員使っているとは限りませんが、多い事には変わりはないですね」

「ダウンロード出来なくなっただけからは金銭で売買する人が増えてきているみたいです」

「てことは、実質止められないな」

「ですわね。その取引場所は分かりますの？」

「ちょっと待ってください」

すると、隣のプリンターから何枚ものA4用紙が出てきた。

ドッサリです。五〇〇〇は伊達じゃなかったです。

「どうする白井さん。一つずつ風漬しに行くか？」

「ハア。面倒ですが、それしかないですわね」

「じゃあ半々に用紙分けて、別々に漬すか。その方が効率いいし」

「しかし、鞍嶋さんは能力者ではないのですから無理はなさらずに何かあれば連絡してください。それと…」

白井さんは自分の机に向かい、常備されている三段の引き出しから二番目の引き出しを開け、黒く細い、L字型の武器…トンファーのような物を2本出し、俺に手渡してくる。

「制圧用の武器？」

「ま、そんなところですね。私には必要ないので差し上げます。そ

れに、いくら肉体的に強くても限界がありますわ。気休め程度ではありますが、スタンガン式のトンファですわ。出力は死なない程度までなら上げることが可能ですが、出来るだけ弄りませんよう。握り部分の親指側にあるボタンを押せば電流が流れ、再び押せば止まります。出力は人差し指のボタンです」

丁寧に説明をしてくれる白井さん。嬉しいけど、俺トンファーなんか使ったことないんだ。

「まあ、用心としては持つておくよ。ありがとう」

しかし自分が無能力者ということは十分承知しているので、俺は素直に頷いてトンファーとインカムを受け取り支部を出た。

「さて、人混みも多くなってきたし路地裏通って行くかな。この顔で歩いたらまたなんか言われそうだし」

路地裏に滑り込むように入り、資料を見ながら歩く。

ふむふむ、見る限り取引場所はやっぱり建設工場とか路地裏とかが多いな。

取引場所が集中してる学区は…第19学区か。確か寂れた学区とか言われてたっけ。

よし。

「この学区は後回し…っ」と

偶然持っていた赤ペンで後回しと分かるよう を付けておく。

だって怖いじゃん。無能力者の集まりなら兎も角、全員が能力者なんて相手できないよ怖いし。

能力持ちでも…まあ3人くらいまでならなんとか捌ける。レベルによるけど。

「えーっと、一番近い取引現場は…どこだここ？ 地図地図っ」と

ポケットに常備している折り畳みの地図を広げ、場所を照らし合わせる。

「取り壊し予定のビルがある場所だから…廃墟か…ま、妥当な場所か」

地図を折り畳み再びポケットに仕舞う。

と同時に軽い衝撃と聞いたことのある音が聞こえた。

ゴキユンッ

そう、確かこれは…あの似非神父の炎の化け物を”喰った”時と同じ…。

「うおっとー!？」

反射的に身体を左に逸らし、ぶつかった人の後ろに回り込む。

しかし目を向けてみると、そいつは似非神父じゃなかった。

「…ああ？」

色素の抜けた白い短髪。白い肌。それに対して爛々と紅い瞳。……
ああ、アルビノって奴か。

学園都市だし、別に珍しくもないか。いや、アルビノは珍しいのか？

ていうか、勘違いして一瞬ガチになった自分が恥ずかしい。

「あつと、ごめんごめん。前ちゃんと見てなくてぶつかっちゃった。
怪我は…ないみたいかな？」

出来るだけ友好に接してはいるのだが、ぶつかっただけが結構気に障
ったのか凄い目で睨み付けて来る。お兄さん怖いです。

「…テメエ、今何した？」

返って来たのは斜め45°からの変化球。え、なんて？

「何って…いや、ぶつかっちゃっただけだけど」

そんな俺の回答が気に喰わないのか、先程よりキツイ目で睨み付け
て来る。常人なら腰抜けますよ。

てか初対面にテメエって。だからごめんて謝ってるやん！ごめん
て！

「じゃ、じゃあ俺ちょっと用事あるんで！このお詫びはまた今度
つてことにしといてくださいー！」

戦略的撤退。なんか嫌な予感がしたから逃げ出した。

ていうかあれ絶対高レベルの能力者だって！ 雰囲気がそこら辺のモブキャラと全然違ったし！

迷路のような路地裏をクネクネと曲がり曲がって路地裏を出る。いい運動になった。

「ハア、ハア…ふう。好戦的な能力者じゃなくてよかった」

さて、ジャツジメントの腕章を付けて…っと。

「ここからだ…もうちょい歩くか」

にしても時化した場所だなー。まあ近くに廃墟あるし、仕方ねえっちゃ仕方ねえけど。

周りを見渡しながら歩いていると、数人の男達が話している声が微かに聞こえた。

聞こえる方向からするに…。

「地図地図ーっと。…ああ、あつぱり取引現場か」

初春さんいい仕事すぎだろ。

駆け足で声のする方向に向かい、ベルトで固定したトンファーを両手に握る。

「もっ、もっやめなさいよー！」

先の曲がり角を曲がればというところで、聞きなれた声が聞こえた。

「この声…佐天さん？」

壁に背中をくっ付け、角から覗き込む。そこには佐天さんと、4人の男。内1人はボロボロだった。

「その人、怪我してるし」

あらあらおいおいなんで出ていった佐天さん。無茶はよくないのに…。

「すぐに、アンチスキルが来るんだから…」

「（そうだ、白井さんに連絡しとかないと）」

携帯電話を取り出し、電話帳から白井さんの名前を探す。

そして名前を見つけたが、それを押すことはなかった。

ガアンツ！ という耳に反響する甲高い音がその動作をやめさせ、目で見た光景が俺を動かした。

「いつ…!?!?」

「生意気言っじゃねーか。何の力もねえ非力なヤツに、ゴチャゴチャ指図する権利ねーんだよ」

佐天さんの髪を鷲掴む金髪の男。

だからさあ、俺そついうの見逃せないんだつて。

携帯電話をポケットに仕舞いこみ、角から出る。

「ジャツジメントだ。彼女から手を離して貰おうか」

「なんだあ、正義の味方のつもりか？ カカカツ！」

「えーつと、この場合は…暴行傷害か？ ま、現行犯で拘束つてこつとで」

「気に喰わねえな。オイお前ら、殺れ^や」

髭の男と糸目の男が向かつてくる。

「いきがる野郎は引つ込んでな！」

髭の男の拳が顔面に向かつて迫つてくるが、その拳を左手のトンフアーの長い部分で受け止め、右手のトンフアーで鳩尾を殴る。

髭の男は口から泡を吹いて倒れ

「抵抗しないならしないで、それでいいんだが」

「はっ、言つてくれるね。能力者だと思つが…出す前に潰してやるよ！」

糸目はそばにあつた金属をいくつか能力で動かし、俺に向かつて投げつけてきた。

「危ないっ！」

流石にそれは痛い。鉄は危ない。佐天さんだって危ないって言うてんじゃない！

幸い軌道は一直線なのでしゃがんで避け、完全に立つ前にダッシュ。糸目の前まで迫ったら左足を大きく前に出し、左手でアッパーカット。あ、今ゴキツて聞こえた。

崩れ落ちる糸目。痛む拳。結論、痛い。

「危なかった…鉄は危ない」

「く、鞍嶋さん…」

「おっと、ちょっと待ってな。まずは残った奴の拘束だから。おいアンタ」

ポロポロの学生に声をかけ、佐天さんと少し離れるよう忠告する。

「カカカカツ。いい正義感だねえ。こっちも泣けてくるぜ！なあこの厨二病野郎オ！」

両手を広げて襲い掛かってくる金髪。てか何故に厨二病！？別に痛い行動なんてしてないよ！？

「テメエのその顔が厨二臭えんだよ！」

「これか！この顔面包帯が悪いのか！？別に好きでやってんじ

「やねえからな！」

なんとなくタフそうなので、長い部分を金髪の方に向け、電流を流して脇腹に打ち込む。

が、その打ち込みは当たることなく金髪の身体を横切った。

「えっ…！」

「鞍嶋さん、前！」

「カカカツ…！」

佐天さんの声で前を向いて防御しようとするが、間に合わず顔面に全体重を掛けた蹴りが襲い掛かった。

「うがっ！」

痛い痛い痛い痛い顔面は痛いつていうか傷が痛い火傷したところ痛いつての！

「鞍嶋さん！」

「カカカツ、正義の味方も無様なもんだなあおい！」

「いつつ…別に、んな都合のいいもんじゃねえよ」

にしても、さっきのは一体なんだったのか。姿はあったのに当たんなかったし…幻影？ だったら厄介な能力者だな…。

……また痛い思いするけど、今の俺にはこれしかないか。

今更だが、白井さんに連絡しておけばよかった。

軽い脳震盪のため頭が痛いけど、フラフラになりながらも立ち上がる。

「立ち上がれ立ち上がれ！ それでこそ正義の味方だろお？」

「うっせーな…いつつ。来いよ、女の髪の毛を手荒く鷲掴んだ代償を払わせてやる」

「あのガキがつまんねこと言うからだろ。なあ？」

金髪はポケットからナイフを取り出す。刃渡りは大体15cm程か。うん、絶対に刺されたくない。

「はっ、正しいこと言って、何が悪いんだ？」

「っ…！ そういうのが、ムカつくんだよお…！」

え、逆切れ！？

電流を一度切り人差し指で出力を高めに設定し、長い部分を相手に向ける。

幻影とかなら、どっから来るか分からない。でも俺を仕留めるなら直接当ててくるはずだ。なら、賭けてみるか…。

「オラアツ…！」

にしても。

「……いつてえなあ……」

焼けるような痛みと溢れ出てくる血。金髪の奴が気絶間際の足掻きが腹部を浅く突き刺した。

臓器には届いてないみたいだけど、動く痛い……。病院行かないと。

携帯電話で白井さんに電話をし、ついでに警備員にも連絡をしておく。アンチスキル

俺は素直に病院に行くといっておいた。てか、本当は空間移動レポートで病院まで連れてって欲しかったなあ……。

結局あたしは、何も出来なかった。

解決したのは鞍嶋さん。助けられたのって、これで二回目だよな。

「……ヤダな、この気持ち」

同じ無能力者なのに、能力者と戦うなんて。

それは凄いことなのに、妬んじゃう自分がある。

鞍嶋さんは悪くない、あたしが認めたくないだけなんだ。自分の無力を。

あたしは臆病で、最悪だ。

『うつせーな…いつつ。来いよ、女の髪の毛を手荒く鷲掴んだ代償を払わせてやる』

あれって…あたしのこと…かな？ もしあたしだったら、本当に最悪な女だ。

お礼も無しに、あの人の名前しか呼ばなくて…、何もしてない。

能力者と無能力者では何もかも違うと思ってたけど、無能力者同士でも全然違うんだ。

「レベルアップ…か」

あたしは、どうしたいんだろう…？

フアクリティ―17（後書き）

自分の好きなことをやればいいと思うよ）キリッ

はい、てことで…数ヶ月ぶりの投稿。

さて次は何カ月後か。

もしかしたら消えてるかもry

感想意見その他諸々罵詈雑言受け付けております。

罵詈雑言言われるとやめるかもry

え、やめていい？ さーせん。

追伸：1/12日ちょっと修正

フアクリティ―18

第七学区のとある病院に、俺はいた。

まあ普通に患者としてですね。

結構表通りにあるから、人目に付かないように来るのが難しかった。

っていうか、無理だった。

『うわ、なんだよアイツ…』

『すっごい怪我…まさか、スキルアウト武装無能力集団？』

『キヤツ、こっち睨んで来た！』

『おい、目を合わせるな！ 変な言いがかり付けられて痛い目に会
つちまっぞー！』

…もう俺のライフはゼロです。やめたげてえ！！

そりゃあ、顔面に包帯しててちよいとはかし包帯に血がこびり付い
てたら引くけどさ、普通聞こえないように言うもんじゃないの？
本当に傷付くからね、うん。

病院に入ったら受付の人に『キヤー―ーッ！！？』つって絶叫さ
れたんだぜ？ オーバリアクションだろそれ。

唯一平然と接してくれたのは院長のみ。流石院長、こんな変人を目の当たりにしても平然としてらっしゃる。

……自分で変人って言うてどうするよ。

「……いつつ」

「我慢するんだね？ 沁みるだろうけど」

そこで、今は手当てをしてもらってる最中なのですよ。

にしてもこの院長、蛙顔である。寧ろ蛙である。ごめん、言い過ぎた。

「この火傷の痕は、いつ頃出来たものだい？」

「えーっと、虚空爆破事件が出てきた頃だから…四日くらい前ですかね」

「ふむ……。にしては、傷の治りが早いね？」

遅い早いの基準は知らんが、どうやら早いらしい。

「そうですか？ まあ怪我の治りは早い方だと思ってますけど」

ガキの頃とか怪我しても大抵半日経てば治ってたし。まあそれで気味悪がられたけど。

………うわっ、嫌なこと思い出した。やめやめ！

「そういえば、今回の怪我はどういう経緯で出来たんだね？」

「経緯ですか。まあ俺ジャッジメントに所属してるんですけど、その仕事で相手の蹴り喰らっちゃって」

「能力者ではないのかね？」

「違いますよ。……あっ、先生って能力のことに関して結構詳しいですか？」

「まあ患者は無能力者だけじゃないからね？ それなりに詳しいと思ってるよ？」

お、なら俺がなんで開発出来ないのか分かるかな？

「何か聞きたいことでも？ 先に言っておくと、どうやったら能力者になれるかっていう質問には答えられないよ？」

「まあ、そんなんはいんですけどね。えっと、俺がこの学園都市に来たのって最近で、夏休み入る前に”開発”の方やってみたんですけど、いきなり頭が痛くなって止めたんです。だから結局、能力開発はしてないんですけど」

「つまり、どうしていきなり頭が痛くなったのかを知りたいと？」

「まあ、そういうことですね」

考え込む院長。まあ分かったところで、俺の自己満足にしかならないんだけどね。

「…何か過去に、大きな手術はしたかい？ そうだね、脳に関する手術とか？」

「いや、無いですね。手術もしたことはありませんし」

「では、何かの施設に通っていたと言うのは？」

「それもないですね。大体、両親があまり家にいないもんでしたから」

「またまた黙り込んでしまう院長。いや、分からないらな分からないでいいですよ？ 自己満足ですし。」

「まだ確かなことは言えないけど、多分君の脳は特殊な電波に反応するようだね？ 今は、これしか言えないよ？」

「特殊な…ね。分かりました、ありがとうございます」

「何も力にはなっていないけどね？ そういえば、名前を聞き忘れていたね？」

「あ、鞍嶋 優璃っていいいます」

鞍嶋と口にした途端、院長が少し驚いたような顔をした。

「鞍嶋…？ 間違っていたらすまないが、もしかして父親の名前は紅彦ではないかね？」

なんと、こんな所に父さんの名前を知るものがいたとは。

「父を知ってるんですか？」

「ああ、彼とは友人だよ？　ここの機材の製造の手伝いもやってもらっているよ？」

おお、そりゃ凄い。機械系の仕事は機密事項が多いから関係者はあんまり外に出さないようにしてるって聞いたけど、こんな所で会うとは。

「そうか、彼の息子が……」

「え、なんですか？」

「いいや、なんでもないよ？」

ボソツて何か言ったような気がしたけど、まあいっか。

「じゃ、診察はお終いだよ？　火傷の部分はあまり見えないし、切り傷も小さいから包帯はしないよ？　空気に当てて乾燥もさせないとね？」

「はい、分かりました。では、失礼します」

「うん、お大事にね？」

そう言って退室。うん、父さんと母さんの仕事の関係者に会えるなんて滅多に無いことだから、何か得した気分だ。

「だがしかし、事後処理という面倒な作業が、待ち受けていた……
ハア」

重い足取りで、支部へと向かう俺であった。

フアクリティ―18（後書き）

正直書かなくてもよかったんじゃないかってry

新年明けましておめでとーございます。今年も変わらず亀以下の更
新速度でやらせていただきたいと思います。

まあ続けばの話でry

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3955r/>

とある風紀委員（ジャッジ）の能力喰い（ファクリティーイーター）

2012年1月14日02時51分発行